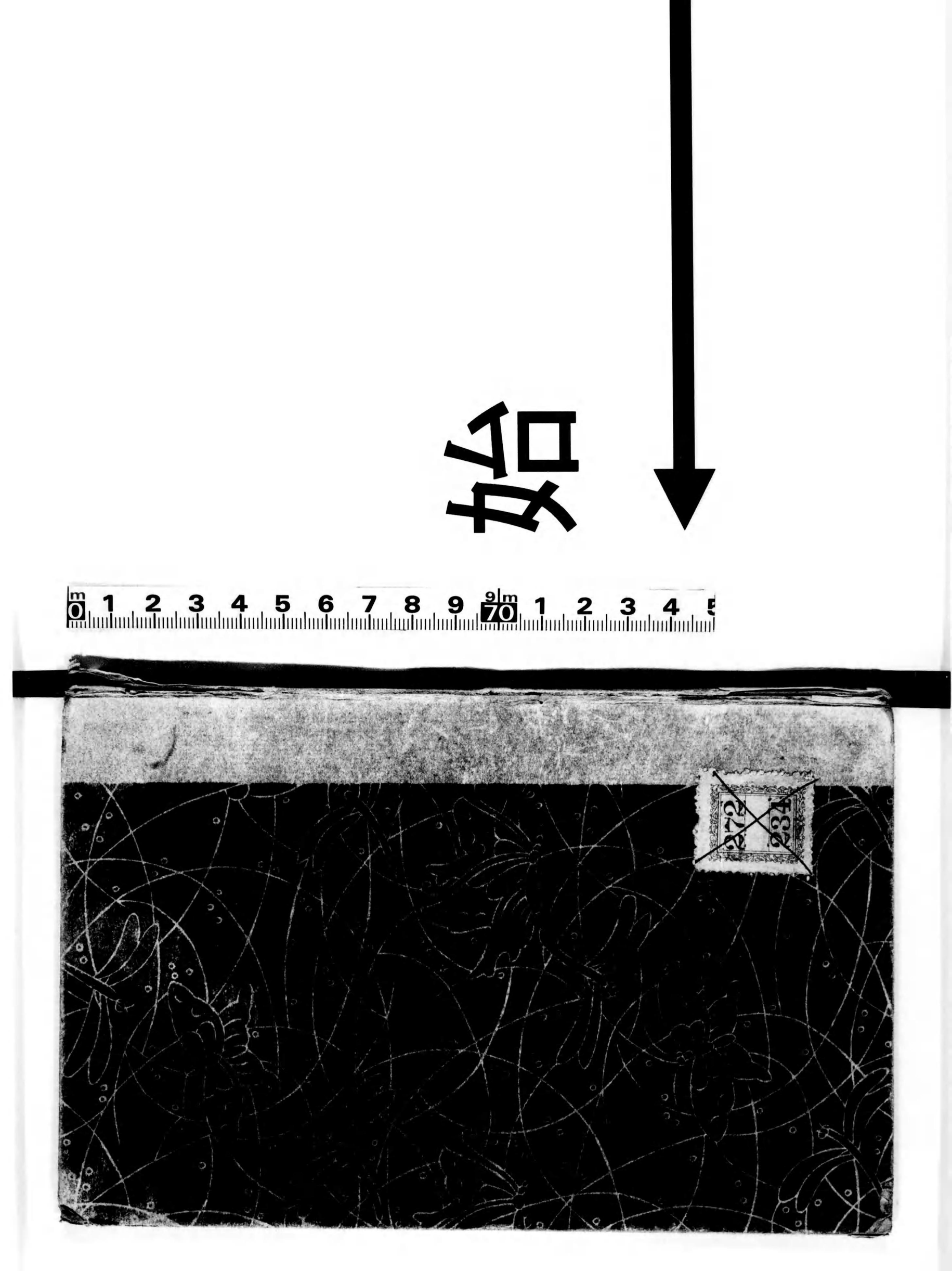
232
234

夜新話橋

正誤

(頁)	(行數)	(誤)	(正)
二七四	二	Il fout	Il faut。
二八六	五	椽先	椽先。
二九五	十	小歌	歌。
三〇三	七	辻君の事に	辻君の事。
三〇六	六	『曉と』ヨリ直グニ次頁ノ『聞く身』ニ續ク	
三〇七	四	立ち姿	立つ。姿
三〇九	一	櫛の背は	櫛の背。
三〇九	三	前髪の	前髪が
三一五	四	鑢	鑢。
三一六	九	Empire	Empire
三二一	一	節廻しは	節廻しに。
三二二	四	光る、	光り。に。、
三二五	一	なんと	なんで。
三二六	五	絮	糸。
三二八	十	人馬鳥獸の糞便所	人馬鳥獸の糞。。便所。
三三二	二	其の目にも	目にも
三三四	六	事さく	事。とさく
三四五	四	もの乃公の	もう。乃公の
三六一	三	餘計にしてゐるかと思ふ	餘計にしてゐる。るとと思ふ。
三六六	六	不愉快に	不愉快。に

(頁)	(行數)	(誤)	(正)
四四六	八	こんな處	こんな。處
四四三	八	この家	この家。
四四一	五	この後	この後。
四三四	十一	思ひがけなく	思ひがけなく
四三四	四	マツチつけて	マツチ。つけて
四二三	七	好機會	好機會
四二〇	六	樋川雨聲	樋川雨聲
四一三	九	僕達は	僕達。は
四一二	七	申し	申し
四一一	十	家大船	家。大船。
四一〇	一	妻も	妻も
四〇九	二	妻に	妻。に
四〇五	十一	眼は	眼は
四〇二	十	に	に
四〇一	十	考へ	考へ
三九九	四	生涯	生涯
三九八	一	偉大な	偉大。な
三九二	六	戀の又だ	戀の力。だ
三九一	十	でもう	で。う
三八三	三	唯だつて	唯。だ。て
三七三	七	搔いて	搔。いて
三七六	六	何でもその儘で	何。でもその儘。で
三七三	二	云つてゐる、連中	云つてゐる。連。中。
四四六	八	處	處

特 106
525

帝國圖書館藏

新橋夜話

永井荷風著

朱夕堂刊

大正
1.12.7
内交

特106
525

小說

新橋夜話

永井荷風著

序

この書題して新橋夜話といふ。收むる處の短篇小說盡く藝者の事を書きたり。抑も此の如きものを書きたる作者の心は、卑俗なる時好に投じて賣文の利を占めんと企てしが爲めか。或はかのDaudetが輕佻浮華なる都會婦女の生活を描寫して Histoires de Moeurs Parisiennes と自註したる諸篇の如くに、純然たる藝術的感興に基きしものか。

或は戲曲 L'Olympe を著せし Augier の如くに、近くは小說 La Prostituée を草せし Marguerite の如くに、嚴格なる道德及社會の問題を考究せんと欲せしが爲めか。そも又 Abbé Prévost が Manon Lescaut の如くに唯永久に可憐美麗なる戀愛の情を語らんとせしものか。そは全く讀者諸賢の判斷に任さんのみ。序文なければ體裁惡しゝと書肆の云ふがまゝ玆に敢て無用の言をなす。

大正壬子初秋　　永井荷風

目次

掛取り	一	色男	三三	風邪ごゝち	三八
名花	一二一	松葉巴	一五一	五月闇	三九一
淺瀬	七一二	短夜	七三二	畫すぎ	九五二
妾宅	一八二	附錄 わくら葉	九三三		

掛取り

一

お葉はその朝朋輩のお松と枕を並べた寢床から起ると直ぐ、いつものやうに鯉口の半纏を被り、手拭を姉樣冠りにして座敷の掃除にかゝつた。お葉は待合衣川の女中である。奥の四疊半には昨夜から泊込みのお客樣があるので、そこだけを除いて二階の欄干や梯子段まですつかり雜巾掛けをして下りて來ると、帳場の長火鉢には内儀さんがもう楊子を使ひながら、昨夜の埋火をかき立てゝゐるところであつた。何處となく酒の香の立ち迷ふやうな薄暗く濕ぽい家内に引換へて、障

子の磨硝子からは表の格子戸を越して、往來の向側に輝く冬の朝日が、如何にも暖く麗かさうに見えた。内儀さんは「お早う。」と挨拶するお葉の姿を見ると直ぐに、

「それぢや、お葉。御飯をたべたらすぐ行つて來ておくれ。遠いんだからね。」

云はれて、お葉はその儘お松よりも御飯焚のお鐵よりも先きに朝飯の箸を取つたのであるが、それでもお化粧をして着物を着換へ、内儀さんから重ねて用向きの口上やら何やらを聞いた後、去年のお歳暮に出入りの藝者衆から貰つた新しい下駄をば自分で揃へた時には、もうかれこれ十一時近くで、勝手口には昨夜の皿小鉢を取りに來る仕出屋の男の聲が聞えた。

お葉は家の前の見馴れた裏通りから藝者家の間の露地を抜けて、朝日の一面にあたつてゐる銀座の大通りへ出ると、今更らしく驚いたやうに四邊を眺めた。通り過ぎる電車の音に譯もなく胸をはずませた。内儀さんから云付つた用事をすつかり忘れてしまつたやうな氣がしたばかりでなく、家を出る時にはよく呑み込んだつもりの電車の道順さへ、もう何が何だか分らなくなつたやうに行先が猶更に遠く思はれた。お葉は十四の秋にお待合衣川へ住込んで以來もう五年ほどになる。箱根へも江之島へも行つた事がある。羽根田も成田さまも知つてゐるのであるが、それはお客樣と藝者衆のお伴をして大勢わいわい騷ぎながら行つた迄の事である。女の身ながら帶の間へ二三百圓の正金をはさんで、一人で夜道を歩いたこともある。然し其れは僅か五六町とは隔つて居らぬ行きつけの銀行へ内儀さんの代りに行つた次第である。ほんとの遠道を唯つた一人で電車に乘るのは、年に一二

度南千住の親元へ藪入りに行く時ばかり、東京の端れと云へば深川と品川と浅草より外には何處も知らない下町の女の身には、今日家の勘定を取りに行く山の手の大久保といふ名を聞いてさへ、まるで狐か狸でも住んでゐる處のやうに氣味わるく想像せざるを得なかつた。一足も早く電車に乘らないと、其の日には歸つて來られないやうな氣もして、銀座の大通をば、松屋や三上屋や天賞堂の店先の美しさにも立ち留る餘裕がなく、直ぐに尾張町の四ッ角まで來た。

「お葉姐さん。お早う。」

いきなり電車を待つ人の間から聲をかけられて、お葉は振り返ると、庇髪に高貴織の半コートを着た玉近江屋の抱へ子であつた。

「君ちやん。お參り？」とお葉は女の癖として、珍しくもない藝者の髪から衣裳

を見た。

「いゝえ。實家に病人があるもんですからね。」抱ッ子の君ちやんは抱へ主の質問にでも答へるやうに、申譯らしく云つて、「姐さんはどちら……？」

「大久保ッて處よ。新宿行に乘るんだつて。茲でいゝんでせう。」

「新宿……それぢや姐さん、向側よ。向側で乘るのよ。」

「あら。」とお葉は驚くほど大きな聲を出した。そして抱へ子が「姐さん、またどうぞ……。」と紋切形の挨拶をするのさへもう聞えぬやうに、夢中で四辻を向側へと突切つた。額には冬の朝ながら汗がにじんだ。お葉はカッフェー・ライオンの硝子戸の前に立つて初めてほつと息をつき、電車の馳せ交ふ四辻の眞中で、よくも轢殺されなかつたものだと、不思議さうに服部時計店の立つてゐる向側を眺め

た。その時玉近江屋の抱へ子は込み合ふ車掌臺の上に押し潰されさうになつて、三原橋の方へ行つてしまつたが、そして其の後からは殆ど空あきになつた電車が幾輛もつゞいて動いて來たけれど、然しお葉の待つてゐる線路の上には、悠々として樽をつんだ荷馬車が通つて行つたばかり。カッフェー・ライオンの横手にはいつか乘換を待つ人が敷石の上に溢れた。お葉は、ふと冬の青空を見上げる拍子に服部の屋根の上の時計が、丁度十一時半をさしてゐるのに氣がついて、もう居ても立つても居られないやうに心が急く。乘換を待つ人達が斷線だとか停電だとか大きな聲で不平を云つてゐるのが、丁度わが家の燒ける火事の知らせを聞くやうに胸を騷がす。お葉は立ちくたぶれて、人々と同じやうにカッフェーの硝子戸へ眷を寄せかけて頭を垂れた。突然あたりの人の色めき立つのに心付いて、自分も後れ

じと眦けつけたが、然し最初に來た電車には、女の身のはかなさは、無論車の近くへ立ち寄る事も出來なかつた。そして、其の次の電車にさへ、お葉は横合からづいと立現はれた色の黑い大男の爲めに折角片足踏みかけた臺から押除けられてしまつた上句、二重廻しの袖でいやといふほど、銀杏返しの片鬢を逆撫ぜにされた。もう何うなつたつて構やしない。半日でも一日でも待たされるだけ待つんだと、早くも捨鉢のお葉はその次に動いて來る電車にはわざと人より後れて乘り込んだ。

日比谷公園に來た時腰掛があいたので、お葉は初めて立ちくたぶれた腰を休めると、それからは丁度車の中もずつと靜かに、窓外の往來も廣々として靜かに、そして頸から肩先一面、後から日光に照りつけられる閉切つた車内の暖さに、

お葉は輕い車の動搖につれて、われ知らずうつとりとした。毎夜を早くも一時過ぎまで用のある身體のつかれが、一時に瞼の上に押しかゝつて來たのである。お葉は兒飼からの奉公人として內儀さんから重寶がられてゐるだけに、お客樣の座敷のみならず、小間使のやうに內儀さんの手助けをしなければならぬ。急しい中をば旦那の晩酌のお相手はまだしも、一番いやなのは、もう六十に近い旦那の總入齒をば御飯の度毎に、うがひ茶碗で綺麗に洗つてやる面倒臭さである。電車が暫く動かずにゐるのと、乘客の出入する氣勢とに、お葉はふとわれに歸つて、驚いて窓の外を眺めた。こんもり繁つた樹木と、高い土手と、水の涸れた堀にかゝつてゐる低い橋とが見えた。向角の新しい家の前には車掌が氣味わるいほど大勢集つてゐる。空の電車が捨てゝあるやうに幾輛も並んで留つてゐる。お葉はこの見

馴れぬ町の有樣に何とも云へない淋しさを誘はれると共に、今までぼんやりしてゐる間に、帶の間のものでも取られやしなかつたかと狼狽へもする。同時に若しや茲が自分の下るべき場所ではないかとも思ひ惑つてもう堪えられずに腰掛けから身體を浮かして、

「もし、こゝは何處です。」

頰骨の出た、顏の平い、眼の釣上つた車掌は、お葉のあわてる姿を流眄に見て知つてゐさうでゐながら車掌臺の上を動かず、寒さうに肩をすぼめて、あらぬ方に顏を外向けながら、平氣でチーンと釣革を引張つたので、お葉は動き出す車と共に浮した腰をすくはれ、出口の方に腰をかけてゐる土方の小頭見たやうな男の膝の上に身體の重さのありたけを投げ掛けた。びつくりするやら、氣まりが惡い

やら、お葉は急いで起き直らうとすると、鐵のやうな重い太い腕がぢつと身體を抱きすくめるやうに、春中の上に載つてゐるのに心付いて、我れを忘れて身を跪いた。

「えへゝゝゝ。」と云ふ賤しい氣味のわるい笑聲と共に、酒臭い匂がして、「女の子にかぢり付かれちやあ、こてえられ無えや。」

「何んて間がいゝんでせう。」と前側にゐた仲間の一人が同じ樣に聲を合はしてどつと笑つた。

お葉は顏を火のやうにして、動いてゐる電車の上からでも構はず飛び下りたい位に思つた。それからといふものは車中の眼は一つ殘らず何時までもお葉の上にのみ注がれて動かないやうな氣がする。土方に抱きすくめられたと知つた其の瞬

間の恐しさが今だに胸の動悸を休めさせない。お葉は此の時ふと車の中には、自分のやうな風俗のもの——少し拔衣紋にした襟付の銘仙に、鼠地の縫紋の羽織を重ね、絲織の前掛けをきちんと締めてゐるやうな女は一人もゐず、女と云へば皆庇髪の詰襟ばかり。男の乘客の大半は兵隊である事に氣がついた。知らない人の中に交つて知らない道を行く心細さが一際深くなる。丁度、乘換切符を改めに來る車掌に向つて、新宿の手前で下りると云ふ行先きを聞きたゞすに及んで、お葉の當惑と心細さはいよ〳〵激しくなるばかりであつた。

「あなた。これア青山行ですよ。新宿へ行くんなら仕方がないから青山一丁目でお乘換なさい。それから鹽町でまた乘換るんです。」車掌は乘換切符をお葉の膝の上に投げ捨てゝ、急いでポールのはずれたのを直しに行つた。

乘換なしで行けるものとばかり呑み込んでゐたのが、一度ならず二度までの乘換へと聞いて、お葉はもう今度こそは眞實に歸つて來られない八幡の藪へ投げ入れられたやうな心持になつた。

二

彼方此方とまご〳〵しぬいた上句の果に、それでもお葉は漸く、新宿の手前の傳馬町二丁目といふ停留場の位置を知り得たのである。知れない行手の難義はまだどれだけ續くのであらう。お葉はもうどんなに叱られても、二度と再び知らない遠い處へなど使には出まい、家にゐて今頃は掃除の後、夜具を干したり、お客樣へ出す浴衣の洗濯でもしてゐた方がと、つく〴〵後悔した。豫想外に賑かな大通りの、右へ曲るのか左へ折れるのか全く見當がつかない。と云つて往來の眞中

に立止つてもゐられないのでお葉は内所で小遣の身錢を切つて車に乘らうかとも思ひ掛けた時、丁度とある横丁の溜りから聲を掛ける車夫を見て、大久保までと云ふと、

「五拾錢おやんなさい。」

「馬鹿におしでないよ。」

お葉はあまりの腹立しさに、後から聲をかける車夫にはもう見向きもせずどし〻歩いて目當もなく横町へ曲つてしまつた。そして有合ふ烟草屋の店先に十五六のまだ肩揚のある娘がゐるのを見て、

「姉さん。すみませんが大久保の余丁町ッて云ふのは、どつちへ行つたらい〻んで御在ませう。」泣かぬばかりの調子である。

「余丁町ですか。」と、娘は氣輕く、「こ〻を眞直に行つて、坂を下りて左の方へ曲ると交番がありますよ。それから……交番でお聞きなすつた方がよござんす。」

お葉は初めて生き返つたやうな氣がした。

「どうも有難う御在ました。」溢る〻ばかりの感謝の情をば表現しやうのない簡單な此の一語に托して、廣からぬ横町をば初めて兩側の樣子を物珍らしさうに眺めながら歩いた。

片側に活動寫眞の西洋館があつて、其の傍の露地から二三人の藝者が何か大聲に笑ひながら出て來るのを見て、お葉はまアこんな處にも藝者がゐるのかと不思議さうに其の後姿を振り返つた。突然凄じい物音がする。何事かと思ふ間もなく大通りの方から、この狹い横町へと、馬に乘つた兵隊さんが幾人となく揃つて駈

けて來るのである。丁度坂の下り口の其の片側にお寺の門があつたので、お葉は少しばかりの空地を幸ひ其處へと身を避けたのはよかつたが、すると、其の門前には電信の工夫が六七人地面へ蹲踞んで午飯の辨當を食つてゐる處であつた。往來の向側に立つてゐる電信柱には竹梯子が寄せかけてある。

「いよ。別嬪。」と工夫の一人が、狼狽へて駈け込むお葉の姿を見ると共に叫んだのが手始めであつた。

「とんだ辨天さまの御入來だ。」

「姉さん。一杯差上げやうかね。」といふ奴がある。地面の上から凄い眼を輝して他目も振らずお葉の裾の合せ目を覗く奴がある。折から突然の風がさつとばかり下襦袢の裾を飜さしたから堪らない、一同はわつと騒ぎ立つた。

「見るは果報だ。」

「新宿へ行きやア二貫の處よ。」

「赤い襠襠は年季が長げえとよ。」

それから聞くに堪へない雜言がつゞいた。けれどもお葉はいかほど逃げ出したくても、馬に乘つた兵隊さんの行列はまだなか〳〵通り切らずに、四邊一面に砂烟を立てゝゐるではないか。

漸くにしてお葉はこの難所を逃れるや否や駈けるやうに坂道を下りて行つたが、すると突然石につまづいて、辛くも足を踏み止める、直ぐ其の前に何か蠢くあ襤褸のやうなものがあつて、

「お通りがゝりの奥樣方や旦那樣どうぞ一文……。」と云ふ聲がする。

二目と見られぬ癩病の乞食が二三人往來の砂の上にひよこ〳〵お辭儀をしてゐるのであつた。坂下の町は谷のやうな凹地の底に、ごた〳〵と小家の汚れた屋根を並べてゐる。お葉は何と云ふ事もなく、此れから先きは穢多町ではないのかと思つた。

下り切つて、煙草屋の娘に敎はつた通り左へ曲ると、直ぐに交番所があつた。丁度人のよさゝうな、髯のない巡査が往來の眞中に立つてゐたので、お葉は行先の町を尋ねると、

「余丁町は何番地だね。」

「六十二番地でございます。犬山さんて仰有るんでございます。」

「六十二番地……それぢやアこゝを眞直に行つて、大きな酒屋の前の坂を上る

んだ。」

「はい。」

「それからずうつと何處までも眞直に行つて三ツ目の横町だつたかな……右へ曲ると六十二番地だ。」

「どうもお世話さまで御在ました。」

お葉は半町と行かぬ中、すぐにそれらしい酒屋と坂道を見付けたので、もう行先は譯はあるまい。人力車にも乘らず、たつた一人でこゝまで、たいして廻り道もしないで來られたらしい事が、今では自分ながらえらいやうに思ひなされて、お葉はしばし足のつかれをも忘れたが、さて、いよ〳〵坂を上りかけると、一難去つて又意外なる一難に出遇はねばならなかつた。

下町は埃が立つて困るほどの天氣つゞきといふのに、山の手は昨夜雨でも降つたのか、廣くない往來は避けて歩く片側もなく、一面泥濘になつてゐる。乾く間もない日陰の道の霜解けである事をお葉は初めて物珍らしく悟り得た時には、已に新しい駒下駄の爪先ばかりでなく、洗ひ立ての白足袋の踵へも、大きなはねを上げてゐたのであつた。片側は枳殼の土手、片側は枯れかゝつた杉垣根の人通りがないのを幸ひに、お葉は懐紙をだして疊の泥を拭き取つたのも、幾度だか知れない。巡査の教へた三ツ目とかの横町は他分酒屋の小僧の出て來たあの曲角であらう。

三

霜解はます〳〵はげしい。大きな野良犬が薄氣味わるく歩き廻つてゐる。齒の浮くやうなヴァイオリンの音が聞える。あたりの樹木に物凄い風の音がする。遠く横町のはづれは再び坂になつてゐるらしく、新しい人家の屋根と其の後一面の深い木立には冬の日光がいかにも物靜かに照りかゞやいてゐたが、横町は兩側ともに日陰の薄暗く、いづれも同じやうな生木の板塀と潜戸付の小門が並んでゐて其の表面には大方近所の子供が惡戯したものであらう、霜解した赤土の泥土をば

汚らしく塗り捨てた痕が洗ひもせずに殘されてある。

お葉が一軒殘らず兩側の門札を眺めて行つた後漸くに目的の番地と姓名とを見出したのは汚らしい中にも汚らしく泥土の跳上つた小門の柱であつた。

犬山猛昌……お葉は門をはいる前に、番地と名前とを重ねて見直した。犬山さんと仰有るのは衣川へ遊びにゐらつしやるお客樣の數ある中にも、これほど喧しい察しのない、無理な方はないと云ふ位あつた。どんなに外のお座敷がいそがしい時でも、お葉を初め家中の女中をすつかり自分の座敷へ呼び立てなければ承知しない。內儀さんがお遊びにお出ての度毎にちやんと挨拶に出て來ないと、人を侮辱しちよるとか、冷遇するとか云つてお怒りになる。議員さんはつまらんから止めて、今では政治屋さんとかいふ商賣をして居らつしやるとの事。若いねんねのやうな藝者がお好きで、それが云ふことを聞かない時には、實に手のつけられない程人を困らせるので、お葉はお客樣の中では一番嫌ひなばかりでなく何となしに其の逞しい相貌と太い聲とに恐れを抱いてゐるのであつた。いかな時でも洋服ばかり召してゐる方で、いつも二人曳の車でおいでになり、電車は下等な奴が乘るからとて、お歸りには必ず宿車をお呼び申すのである。內儀さんが何かの話から、「此の節はお遊びも藝者衆の御祝儀が高くなりましたばかりぢや御在ません。お車代だけでも大變なもので御在ますね。」と云ふと、犬山さんは、「內儀、つかふために儲ける金ぢやよ。あはゝゝゝ。」とお笑ひになつた。

ところが此の如き御全盛も三月とはたゝぬ中、其の年も早十二月にはいるか這入らず、犬山さんはぷいと鼬の道を切つたやうになつて、其の月の御勘定二百圓

近くの上に、其の前の月の殘金五十圓をも合せて、いかほど手紙で御催促申し上げても、一向に御返事がない。衣川では止むを得ず最初に犬山さんをば松本樓とかの崩れから連込んで來た藝者に對して、おきまり通りの掛合ひをして見たが、いづれにしても無い袖の振れぬ事は初めから分つてゐるので、何のかのと云ふ中一月も早く過ぎ、二月になつた今日、まづ偵察かた〳〵女中のお葉を屋敷へ差出した次第である。

お葉は犬山さんばかりでなく、其の他にもさういふお客樣の尠からぬ事實を知つてゐる。けれども、それ等をば單に人の惡いなさり樣だとしか思つてゐない、どうせお遊びになる方は、家へいらつしやらなければ、他の家へ行つてお遊びになつてゐるのに違ひない。そんなら少しは此方の都合も察して下さればいゝのに

と思ふ位のものであつた。お葉が進み入る前に門札を見直したのはつまり犬山さんの日頃の大言壯語に比較して、お屋敷の御門があまりの汚な過ぎたからである。然し此れから先霜解の道をば、目的なく歩く難義を思へば、まづ這入つて聞いて見るにしくはないと、其儘くすぶつた破れ障子の玄關先から、何方がお勝手口かと左右を見廻した。

右側は腐りかゝつた建仁寺垣を隔てゝ見すぼらしい庭樹の陰に、しつくひの落ちた平家の屋根が薄寒さうに横はつてゐて、垣根の竹の隙間からは物干竿にかけた古ぼけた赤毛布と、汚れ〳〵した木綿の褞袍とが見えた。左側にはずつと奥へ下つて別の貸家らしい格子戸付の平家が二三軒あつて、梅の蕾のちらちら目につく車井戸のほとりには、魚屋が鹽鮭を切つてゐる。褞袍の下に子供をおぶつた庇

髪のぼう〳〵たる下女が二人、いづれも鼠色になつた白カナキンの西洋前垂を締めて、魚屋の男と馬鹿口をきいてゐる最中らしかつたが、風俗の異つたお葉の姿を見付けるや否や、下女共は目に角を立てゝ、寧ろ恐るゝ如く、不審さうにその爪先から頭の端までを眺めた。井戸端から勝手口までは炭俵が敷いてあつて、霜解の泥水は俵の下から其の上を歩む人の足元にじく〳〵湧き出る。お葉は進退極まつて、其の場に立ちすくみ、腰をかゞめて、

「御免下さい。」

けれども下女は驚いたやうに口をあいたまゝ二人とも默つてゐる。

「犬山さんのお屋敷は此方で御在ますか。」

下女の一人は俄にもち〳〵し出した。お葉はそれと察して、「京橋からお使ひに

參りましたんですが、旦那様はおゐでゞ御在ますか。」

「お留守です。」その時背中の子供が泣き出した。

お葉は内儀さんからの云ひつけ通り、もしお留守と云はれたら、鳥渡お勝手口で奥様にと云つて、内儀の名字なる水田からのお使だといふ事だけを云ひ置いて來べき手筈は、ちやんと心得てゐたものゝ流石まだ十八九の若さだけに、何となく氣後れがして、霜解の水が低い駒下駄の磨いた桐を沒して危く疊の上までしみ出しさうなのも忘れて、その儘俵の上に立ち止つてゐた。下女の背中で子供がまだ〳〵泣く。

「千代。千代。」と突然耳元近くから女の呼ぶ聲が起つた。

お葉はびつくりして振り向くと、一間とは隔らぬ勝手口らしい破障子の間から

眼の間のおそろしく離れた馬のやうな大きな女の顔が見えた。下女にもまけない蓬々たる庇髪。汚れて皺だらけになつた被布姿の見上げるやうに大きなで〳〵した奥様である。

丁度魚屋が鹽鮭の切身三片ばかりを、皿に載せて奥様のお手元へ奉りに行つた。奥様は何やら魚屋と話をして居られる。お葉は何といふ譯もなく初めて目のさめたやうな、同時に深い絶望を感じて、その儘逃げるがやうに門の外へ出てしまつた。遠道を難儀して茲まで來た事が、いかにも無駄足であるらしく思はれたからである。内儀さんは山師にかゝつてすつかり欺されてゐたのだとしみ〴〵氣の毒なやうな氣がした。

お葉は再び電車に乗つた時、力抜けのした疲勞と共に、初めて堪へられぬほど

お腹のすいてゐる事を知つたが、もう何うする事も出來ずに銀座まで來てしまつた。日がもう傾いてゐる。今朝電車を待つ時に見た服部の時計臺を思出して見上げると、あゝもう四時近くになつてゐるではないか。お葉はいつも遠道の使ひから歸つて來る時、早かつたねと云つて呉れた例のない主人の眼の輝りを思起して、今は氣の急くよりも自然と心が滅入つてしまつた。商店の中にはもう電氣燈がついてゐる……。

色（いろ）

男（おとこ）

一

芝居を見る度、自分は大阪の芝居に出て來る色男と、東京の芝居に出て來る色男とは全く面目を異にしてゐるのに心付く。伊左衞門も治兵衞も忠兵衞も、大阪の色男はどれもこれも、皆飽く迄柔和で親切で、そして何處にか恐ろしい程我慢づよい處齒切のしない處がある。封印切の忠兵衞が若し江戸ッ子であつたならば、封印のきれるまで、あんなに何時までも八右衞門の侮辱を忍んでは居まい。封印の切れる騷ぎの前に、癇癪を起して八右衞門をぽかりとやつ付けてしまつたかも

知れぬ。先代菊五郎のやつた炬燵の紙治は、治兵衛の人物を現はす點に於て、到底雁次郎の河庄には敵しないとか云ふ。音羽屋の紙治はどことなくいき過ぎて、さつぱりして、女々しさが足りなかつた爲めであらう。「冥土の飛脚」の作者が如皐か默阿彌であつたならば、忠兵衛は封印の切れるのを見ると共に直ぐと氣が變つて、くるりと尻を卷くり、泥棒になつて高飛びをして仕舞つたに違ひない。女に見惚れて自分の肩先から羽織の落ちるのも知らずにゐる程の若旦那與三郎と雖も、一度切りさいなまれて生き返つた後は、まんまと豪儀なゆすりになり得たではないか。坊主の修業をしてゐる清心は女犯の罪を悔いて入水したものゝ、いざ死にきれないとなつた曉は、飜然として鬼薊清吉と化した。江戸の作者の筆になつた色男は馬鹿に手早くあきらめを付ける代り、おいそらと默つては引込まない。どこか下品で惡賢く、一度もう駄目だと思切つたら、さらりと氣を入れ替るが早いが、直ぐに捨身になつて惡に出る。それも最初から大概の見當をつけて置いて、何かの機會に逢ふや、また譯もなく、もう好加減に年貢の納め時だと、自分から綺麗さつぱり萬事の結末をつけてしまふのである。

自分の知つてゐる若旦那京さんの遣口は、何かにつけて一寸然う云ふ趣きがある。京さんと云ふのは銀座通の唐物屋の息子で、其の年の春、二十八の聲を聞くと、どう思つたのか突然もう惚れたはれたでも有るめえと云つて、媒介口の見合もせずに、堅儀の娘を貰つて馬鹿におとなしくなり濟して仕舞つたが、それまでには隨分はげしく新橋界隈を荒して歩いた。

京さんは色の淺黑い細面の、小氣味よく締つた口尻と、剃立の髭の靑く見える。

際立つた頤の様子とに、どことなく意地のわるさうな凄味があつて、例へば喞煙管でもして、鳥渡人を横目に見る時なぞには、殊更にこの特徴が初對面の人の目に印象を留め易いのである。大勢の人中なぞでは一向目立ない代り、私や伊井さん見たやうな人は大嫌ひと、頼まれもしないのに妙にすねて見せる連中に對しては、往々にして京さんのやうな種類の容貌が、甚だ成績のいゝ事は、京さん自身も已によく此れを承知して居たので、京さんは極く遊び初めの時分から、自分ばかりはもう三十代の男のやうな、一切澁い物づくめにしてゐたのであつた。尤もこれは單に衣服の趣向からばかりではなく、何につけ人から世間見ずの、甘え、お若いお坊ちやん扱ひにされるのをば、此の上もない侮辱のやうに感ずる負けぬ魂から、京さんは誰かゞ先代高島屋の松島千太に似てゐると評した其の頤の

特徴をば、自分からも唯一の頼みにして、言葉使ひから身振まで五分のすきもないやうに心掛けてゐるのであつた。けれども要するに其れは一人よがりに終つたかも知れない。いかほど自分でばかりすきがないつもりでも、何處か知ら、投げやりな鷹揚な態度が、どうしても若旦那たる本來の境遇を説明せずにはゐなかつたからである。

然り京さんは若旦那である。部屋住みの身の上である。衣食住には何一ッ不自由のない結構な御身分である代り、手元の小遣錢と來たら、いつも〳〵全くの不如意である。然しこの點に於て京さんはいか程身の薄命を唧つたとて、この生活難の世の中に誰一人同情の意を表するものがあらう。京さんは一時やけになつて亂暴もして見たが、自分から己れの不始末を曝露して親爺に泣きを入れるなぞは、

考へて見るまでもなく餘り器量のいゝ話ではない。と云つて二度とない二十歳の盛りをむざ〳〵、勸善懲惡孝子鑑どのになりすまして、年寄供から賞めちぎられてばかり居るのも、ちと氣がきかな過ぎはしまいか。お目出度すぎはしまいか。金いらずに遊ぶ法とは此れいかに。京さんは慘澹たる人知れぬ苦心の結果、いつとなく自分の腕といふ事に對して自信を抱かざるを得ぬやうになつた。人並みの高い錢を出して遊ぶのなら、何處の土百姓にでも出來る話だ。乃公アかう見えても銀座の土地つ子ぢやねえか。何も此方から貰はうと云やしねえ。お互に出ず入らずで、面白可笑しく遊ばう、遊ばれやう。そこが卽ち腕だといふ事を感ずるに至つたのである。京さんはつまり此の社會の人の所謂客色と稱するものにならうと心掛けたのである。米八からの仕送りに其日を暮した丹次郎の境遇は、梅暦時代

の古い夢である。新しい今の世の中の色男は、女に對して出來るかぎり金錢上の負擔少くして、而も最も金錢上の負擔多き歴とした「旦那」と同等若しくは其れ以上の好遇を、女から受けやうと云ふに過ぎない。然しこれとてなか〳〵容易の業ではない。それには先づ多少なりと、女から好かれなければならない。好かれるには、先づ第一に女から認められなければならない。こゝに於て、京さんは新橋千人近くと數へられる藝者の中誰れか一人、自分を認めてくれるものはあるまいかと、凡そ藝者の多く集まる處と云へば、芝居寄席緣日を初め、外出の機會毎にも必ず横町や露地を歩くやうにと日頃から怠らず心掛けてゐた。

京さんは已に銀座の土地ツ子である故に、小學校時代の同級生で、今では有名な妓さんになつてゐる誰れ彼れをも知つてゐたし、また折々は自分の店へ香水や

白粉紙を買ひに來る若い女とも顔馴染になつてゐたので、心中では必ず自分の希望の成就する日のある事を確信してゐたのであるが、然し其の期待の餘りに堅實であるだけに何とも云へぬ心の焦立ちと、待遠しさとが、折々は反動的に譯もなく深い絶望を呼起すこともあつた。

二

十月のうるはしくも晴れ渡つた或朝京さんは舶來の卷煙草を買ひにと、自分の店からはつひ四五軒先の煙草屋までゴム裏の雪駄を引摺つて行つた時、ふと見返る横町の片側に、汚れた家財道具のさま〳〵が、疊や藁屑や紙屑と共に、痛ましくも秋晴れの日當りに取り出されてゐるのを認めた。金春の裏通りも矢張り大掃除にちがひあるまいと思ふと、京さんは何と云ふ譯もなく、咄嗟に起る好奇心に誘はれるまゝ、買立ての埃及煙草の煙をば黴臭い塵埃の中に棚曳せつつ、四邊を

見て見ぬやうに横町の方へ歩いて行つた。果して格子戸つゞきの裏町は時ならぬ煤拂ひの大混雜。綿ネルの腰卷に布子の裾をはしよつた下女や小女は、頰冠りの車屋らしい若衆と入り亂れて立ち働いてゐたけれど、その邊には追出されの飼猫と共に、藝者らしい女の姿は更に見えない。京さんはぶらぶら横町を通拔けて、横川町の堀割から再び銀座の方へと、博品館の前まで來ると意外にも其處の停留所には往來の人の目を引く一團の紅裙隊があつた。しかも其の中からは京さんの顏を見て目禮を施すものさへあつたではないが。京さんは思はず小走りに歩み寄つて、「お揃ひですね、追ひ出されたんですか。」

「行き處がないから、淺草へ遊びに行くのよ。」

「京さんも一緒においでなさいよ。」

願つたり叶つたりと云ふ處であるが、わざと京さんは躊躇ふやうな遠慮するやうな風を見せて、返事を口籠らせた。商賣人の女に對しては、あまり圖々しい風を見せずに、何となくおぼこらしく猫を冠つて置く方が、相手に油斷をさせるだけでも後日の爲めになると日頃から氣づいてゐたからである。

電車が來た。京さんは行くとも行かないとも全く曖昧な態度で、女達の後について電車に乘つたが、すると直樣知れぬやうに、自分を入れて一同六人分の切符を買つて仕舞つて、軈て女達が帶の間から銀貨入を出しかける時、

「切符ならもう濟んだんですよ、乘替はいらないんですね。」

電車はかなり込んでゐる。一行の中三人の女は腰をかけたが、立つてゐる殘りの二人は、自然と京さんの左右から其袖につかまつた。京さんは電車が留つたり

動き始めたりする度に、窃と厭味のないやうに二人の身體を押へなぞして劬りながら、心中に一同の容貌風姿を品評した。立つてゐる中の一人と腰をかけてゐる中の二人とは、てんで一顧の價もない、一人はいかによく見てやつても西洋料理屋の女ボーイとしか見えぬ田舍臭い庇髪のふとつちようであり、他は見た處から仇じけなさゝうな名古屋面で、又他の一人はあまり申分のない美人過ぎて、一寸おいそらと京さんなんぞの持物にはなりさうもない。で、京さんは早速殘りの二人に眼を移す。二人共にそれほどの容貌ではないが、流石賣り物だけにそれ〳〵の特徴がある。然し一人の方は少し年が若過ぎはしまいか。まだ二十になるかならずの、他分丸抱への兒に違ひない。達引の才覺まだして男をよぶほどの智慧も道樂もあるまいし、遊んでも唯だ柔和し向き一方と云ふ玉らしい。京さんは能く

遊ぶ人の云ふ通り、色にする藝者と云へば自前は慾が出て世帶臭く、主人持は自由がきかず、其處へ行くと何方付かずの「分け」と云ふ年增盛りに越したものはないとの一說を、尤至極と是認してゐたので、丁度見た處二十四五かと思はれる最後の一人の方に、專ら空想の目的を移した。中肉中丈、色は白い。髮のいゝのと眼のぱつちりしてゐるのが、いかにも晴れやかに見える。氣もさくい方と見えて、まだ京さんとは初對面でありながら、最初から一番多く話をしかける。臆面なく「京さん〳〵」と云つて其の名を呼ぶ。白木屋と三越の前を通る時に、「あゝ、いゝ友禪だ。京さん、あたいに彼れ、似合ふと思つて。」と唐突に面も親し氣にきくのであつた。

京さんは嬉しいあまりに憎らしいやうな心持にもなつた。此の女を物にしたい

と思ふ念の押へられぬ程激しくなるにつけ、もしや自分より先にちやんと情人ができてゐて、自分は後れ走せに指を喰へて引込まなければならぬやうな場合に遭遇したら、どんなに情なく癪にさはる事であらうと思ふと、一層初めから話なぞせぬ方がよかつたやうな氣にもなるのであつた。然しわれ知らず身體と心とが其の女の方にばかり引付けられて、京さんは電車を下りてから一同揃つて仲店を歩く時には、自然とその女と肩を並べ袖を摺合して行くばかりか、あんまり人込みの烈しい處々では、何方からとも知れず手をさへ引き合つた。

御手洗で手を洗ひ參詣をすました後、一同はすぐに活動寫眞へ行くか、それとも晝飯を先にするかといふ議論になつた。

「何時だい。一體……。」

「まだ十時半だよ。」

「私は今朝おまんま食べないんだよ。」

斯う云ふ會話が通りすがりの人を驚かした。京さんは一先づお汁粉屋へでも行つて休んだ上で、ゆつくり相談しようと云ひ出したので、一同は忽ち同意してぞろ〳〵公園の端れの松村へ押し掛けた。さて活動寫眞を二軒立てつゞけに見て仕舞ふと、今度はいよ〳〵池のほとりに立止つて、食事は中清の天麩羅にするか、金田の鳥にするか、それとも一層きばつて大金にしようかと云ふ三議案が提出された。然し歩きながら議論して行く中、いつか仁王門の下まで來ると、一行の中の一人が一分一秒も早く便所へ行きたくなつたと騒ぎ出したので、其の儘一番近い鳥屋の金田へ馳け込む事になつた。鳥鍋を二ッにした其の一方には別に云ひ合

はしたのでもないのに京さんは再び目的の女と膝を突合はして坐つた。すると、

「人前があるよ。菊ちやん。」

「今日のは、京ちやんと菊ちやんのおごりでせうね。」

先刻から早くも目をつけてゐた岡燒連の冗談が、姦しいばかり湧起るが中に、菊ちやんと呼ばれた其の女は、「うるさいね。百も承知だよ。ねえ、京さん。」と云つてわざと京さんの方にぴつたり寄添つて見せた。

菊ちやんは一同の中で一番眼の緣を赤くするほど飲んだ。そして京さんが勘定をしようと云ふのを無理に止めて、自分の紙入れから五圓札を出して外へ出ると、少し千鳥足のふら〳〵するのを、人目も構はず京さんの方に寄添ふのであつた。

三

一同は四時頃に新橋へ歸つて來た。京さんは三銀と青柳の間の露地口で別れて一人銀座通りを我家の方へ歩いて行つたが、何か大きな手で輕く兩脇をすくひ上げられるやうに、足が地面へ付かないやうな心持がする。もう十の九までは成功したと思ふと、一刻も早く最後の運だめしをせずには居られなくなつた。京さんは此儘すぐに信樂新道の知つてゐる待合へ行つて菊ちやんを掛けようかと、電車道を横切りかけたが、それでは何だか餘り心の底を見透されるやうで、出來る處

も却て出來ずにしまふ恐れはあるまいか。一人で料理屋へ行つて呼んで見るのも少し事が改まり過ぎて妙でない。三十間堀の富貴亭か、仲通りの喜仙あたりから、一寸晩飯でもと云つてやりたい處であるが、それには唯た今鳥屋の金田から歸つて來たばかりで、あんまり時間が早過ぎる。京さんは夕方灯のつくまでは、到底待つに待たれぬ煩悶のあまり、再び博品館の方へ引返して汐留の堀割を三十間堀の方へと、徒に秋の夕暮の晩きを嘆じながら歩いて見たが、遂に策盡きて通りがゝる信樂新道の待合の格子戸をあけて仕舞つた。心休めに一先づ上つて見た上で、更に考へ直さうと思つたのである。女中は二階の一間に案内しながら、

「暫くですね、若旦那。どうなすつたの。」

「お捨さん。お前菊松ッて云ふ藝者を知つてゐるかい。」

「新橋家でせう。先の中は家へもよく來ましたよ。」

「あれアどうだい。便利な方かい。」

「また。知りませんよ。若旦那。」

「旦那があるのか。」

然し女中は徹頭徹尾職業的な無差別な調子で、

「掛けて見ませうか。氣のさくい面白い人よ。私大好きなの。」

京さんは今方淺草から一緒に歸つて來たのだとも云はれず、テレかくしに、

「居るだらうか。」

「今時分出來ない事があるものですか。」女中は心得て其の儘下へ降りて行つて仕舞つたが、直樣電話をかける鈴の音がする。耳を澄して聞くと、「新橋〇〇〇番：

……もし〳〵新橘さんですか。こちらは松月ですよ。菊松さんお座敷……あら然うですか。それぢや急いで下さい。」

それなり家中は寂とした。隣近所には三味線の音もなく電車の響が嵐のやうに聞える。京さんは無意識にお通しのかき餅を菓子皿の中から摑み取つて、冷めきつた茶の殘りを一口呑まうとする時、女中がお銚子を持つて來て、

「今お湯ですつて。直ぐ參ります。」

けれども待つ事一時間ばかりであつた。銚子の一本は早くも殘り少くなつた頃、梯子段を上る足音も聞えずに、突然スウッと襖を明けて、菊松が差覗くやうに顏を出した。

「あら。」とさも驚いたやうに、そしてスタ〳〵と歩み出て、京さんの膝の上に自分の膝頭を載せるやうに寄り付いて、鳥渡京さんの顏を見てにつこり笑つた後、

「姐さん、暫くぶりだわね。またどうぞ。」

この樣子に京さんは、今日は又どうして斯う運が向いて來たのかと寧ろ自分を怪まずには居られなくなつた。萬事は皆お誂ひ通りに行くのである。酒酣なる頃一先づ席をはづした女中が、「菊松さんお電話。」と云つて來たが、菊松は呼び立てられた其の電話口から歸つて來るや否や、氣に喰はないお座敷だから斷つてしまつたのだと云ふ。それから二人で、お酒の後のお茶漬をすました時、京さんは囁くやうに調子を低めた輕い聲で、「菊ちやん、いゝのかい。」と云つた。此れは相手に對して全然諾否の權利を任せるから、厭なら遠慮なしに厭だと云つても差支はないのだとの意味を呑込ませると共に、萬が一厭だと云はれた場合に際しては、

自分の方では其れほど強てお願ひしたのぢやないからと、相應の餘裕を示して失敗の時の器量を成りたけ下げないやうにとの豫防にしたのであつた。ところが菊松は輕く京さんの膝をつねつて、「御迷惑なんですか。濟みませんね。」と云ふやうにすねた樣子さへ見せたでは無いか。

この晩を初めとして、年來夢みてゐた京さんの希望は、逢ふ度毎に事實となつて現れて行つた。毎日一度づゝ電話か手紙を交換する事。お湯か髪結さんへの行き歸りを待ち合し顏を見ようと云ふ事。お參りをかこつけに忍會ひをする事。三度に一度は家への手前表向きのお客對藝者で遊ぶ事はあつても、向島あたりへ遠出でしけ込むやうな時には、菊松は自分で自分の身體をつける事など、凡そ藝者が其の色男たるべき相手に許す凡ての特權を、京さんは一擧にして贏ち得てしま

つたのである。

四

毎月の五日の水天宮、十日の金比羅さまに、朔日二十八日の不動様と、その日その日は過ぎて、袷は忽ち綿入と變つて行き、池上のお會式からは間もなく酉の市の物日が來るかと思ふと、大概のお客はそろ〳〵遠廻しに逃を打ち、女は無い智慧を絞つて腕によりを掛ける年の暮になつたが、京さんは何處を風が吹くかと云ふ境遇。菊松からはお揃ひにするのだからとて、却て其年流行のラクダの毛織の襟卷を貰ひ受けるほどの景氣であつた。されば春のお約束とて京さんは唯だお

茶屋への體裁だけに三日程付けてやつたに過ぎない。然し松がとれると間もなく、横町の晝過ぎには羽子板の響も次第に消え失せ、笄に白襟の往來も目に〳〵少くなる頃、連日の曇天は遂に一日一晩を小降みもない大雪となつた。

「雪が降つたら屹度よ。奥の植半へ行つて遊ぶのよ。」斯う云はれた約束の日をば京さんは今日か明日かと、實は寒の入りになるかならぬ先から待ち兼ねてゐた事とて、何となく其の色さへ鈍つてにじんだやうに見える雪の日暮れの灯と共に、世間一體も何處となく蕭條としたやうに思ひなされる其の嬉しさ。京さんは自づと三千歳を訪ふ直次郎のやうな、何とも云へない哀愁の情味に醉はされながら、傘に吹雪をよけつゝ、竹川町の自働電話からまづ今宵の首尾を聞かうとて、菊松の家へ電話をかけた。聞き覺えある内箱の女の聲で、

「出て居ります。」
「お座敷ですか。」
「はい。」
「何時頃歸るでせう。分りませんか。」
「はい。只今出ましたばかりで御在ますから。」
京さんは近所のビヤホールで時間を潰した後、再び掛けて見たが要領を得なかつた。箱屋の口からは藝者の出先きは一切云はぬと云ふ此の社會の習慣をもよく知つてゐる身分だけに、さう野暮な質問も出來ず、京さんはもう斯うなつたら據所なく待合の手を借りて聞合すより仕樣がない。去年の暮から勘定があまり奇麗にしてないけれども、背に腹は換へられぬと覺悟して、例の信樂新道へ赴いた。女

中のお捨に電話をかけさせると、矢張り簡單にお座敷へ出てゐるとの事。更に聞き直させると、「唯今出直りになりましたから。」と云ふのである。時間を計つて再び貰ひをかけると今度は、「出先へ通して置きましたから、當人から御挨拶致させます。」然しいかほど待つてゐても、一向に當人菊松の出先からは挨拶がない。いつか十時も過ぎて、雪の夜は次第に靜まり返るにつけ、待つ心はいよ〳〵焦立つて來る。女中を急して其れから といふものは、立續けに五六度も催促して見た結果、やつとの事で、「時間までには間違ひなく伺はせますから。」との内箱の返事に京さんもまあ仕方がない、どうせ情夫は引け過ぎだと、稍氣を落付かせたが、いよ〳〵其のお時間の十二時も打つて一時にもなつたが、菊松の來るべき樣子は更にない。京さんはもう堪まり兼ねて又もや女中に電話をかけさせると、噫、こは何

事ぞや。菊松は昨日の午後から何處へか遠出に行つてゐるので、家でも多分今夜はもう歸るだらうと思つてゐた處、此の始末で何とも申譯がないとの事實が判明した。

「ねえ、あなた。それならそれと最初から話のわかるやうに云つて呉れゝばいゝぢや在りませんか。あんなドヂな箱屋ッちや在りやしない。」と女中のお捨までが憤慨の語氣を包み得ない始末である。内儀も同じやうに、

「此の節の藝者衆は、あんまりづらう過ぎます。其れア家業ですから、打明けてお話をすれば身も蓋もないやうなものですけれど、同じ細工をするなら、ねえ、あなた。ばれても心持のいゝやうに、綺麗に細工をするがいゝぢや有りませんか。べん〳〵だらりと引張つて置いた上句に、申譯がないぢや、お茶屋が困ります。

お茶屋がお客樣へ顔向けの出來ないやうになつて仕舞ひます。」

全く其の通りである。腹立しさに他の女を呼ぶにしても、もう時間過ぎではどうにもならぬ。京さんは歸るに歸られず、幾月か前から空想してゐた此の蕭條な雪の夜を空しく獨り寂の憂目に遇はねばならぬ。一晩中眠られぬまゝに菊松の事をば、あゝか斯うかと考へられる限り考へ盡した。

京さんは折角の書き入れ日をふいにされた事に對して云はうやうもなく業を煮やしたのであるが、然しそれは何にも外のお客と遠出して宿り歩くからと云ふ譯ではない。そんな野暮らしい甚助筋は京さんの最も賤しむ處である。已に京さんは當人の口から菊松の身には旦那が二人ある。そして一人は兜町のお客、他の一人は實業家の某と云ふ名前までをもちやんと打明されてあつて、此の二人の旦

那の來る時には電話か何かで出先のお茶屋までを知らせるから、野暮を云はずに飽くまで陰の人になつて居て貰ふと約束までしてある。然るを今日の雪の日に限つて、初めてだんまりで行く先知れず、而も昨日の午後から二晩も遠出をすると は甚だ意外である。いつぞや箱根へ旦那と出かけた時なぞは、旦那の寢てゐる隙を伺つて長距離の電話まで掛けて來て、「商賣だから堪忍して下さいよ。」と云ふ嬉しい聲を聞かしてくれた事さへあつたぢや無いか。それを今度に限つて、而も先方から云出してお互に都合して待つてゐべき筈の雪の日を、此の始末に至ると は。此れア事によると、是非にも祕密にしなければならぬ他の色男があるんぢや無からうか。それとも或は突然何處かのお座敷から、丁度大掃除の日、初對面の自分と偶然出來合つたやうに、珍し好きの新色を拵へやがつたのぢや有るまいか。

京さんの堪へられぬ煩悶苦惱は專らこの點に存したのである。

然し全く手掛のない、此方でばかり想像する此の事の眞相は、要するに當人の菊松について相應の手腕を弄して、聞き正して見ない中は、どうとも今の處では判斷のつきやうがない。判斷のつかぬ不分明に對する不安の懊惱は卽ち菊松の顏を見ざる限り、結末を告げぬ次第である。京さんはもう雪の夜を遊びたいと云ふ事よりも、戀しいから逢ひたいと云ふ事よりも、此の堪へられぬ不安の懊惱を排除する必要上、一刻の猶豫もなく菊松に逢はねばならぬ。いよ〳〵激しく此の必要に迫められるにつれて、ます〳〵目下行先の知れぬ菊松の事が憎らしく又賴りなく思はれて來て、京さんは次第々々にいつともなく、乃公はもう屹度寐返りを打たれたに違ひない。眞底商賣氣離れて惚れ込んだなぞと云やがつたのは、皆嘘

だ。矢張り懷中の寂しい奴は、末の見込がないと云ふので、もつといゝ奴を見付けて今頃はいま〳〵しくデレ込んで居やがるに違ひない……と叢り湧く最初の想像をば我れ知らず動かしがたき事實のやうに、絶望の意識を明確にさせて行くのであつた。させて行かざるを得なかつた。

夜はおそろしいまで靜かに更け渡つた。雪はいつか止んだらしく、轟然と吹起る風と共に、廂の雪の吹き拂はれる響がした。京さんは枕元に置いた水さしから一口ぐつと醉醒めの水を呑み、枕と便所へ行つて歸つて來ると、自分ながら怪しむまで沈靜した心の中では、已に菊松を他人に取られたものとして、其れに對する自分の身の振方はどうすべきかと考へてゐるのであつた。そんな先の事まで考へるのは、まだ少し早過ぎるとは知つてゐながら、一度び起つた疑念に對する自

問自答の結局は順序としてどうしても一應其處まで進めて置かねば氣が濟まないのである。駄目ぢやあないかと疑ふや否や、殆ど本能的に突差の意識がそこまで透徹して仕舞ふのである。

京さんの考へついた結果の手段は、新しい戀の敵と菊松の仲を邪魔してやらうか。邪魔するにはどうしたらよからう。どうしたら一番相手二人が閉口するだらう。それとも寧そ其樣あくどい罪なことをせずと、お前がさうなら此方も此方だ。此方ではお前より先きに疾から飽きが來てゐたので丁度いゝ都合だと思はせるやうに、一思ひに奇麗さつぱり切れて仕舞はうか。或はその方が一段器量を上げるかも知れない……。

降り積つた雪の上に照る輝く朝日の光に、その夜はいつもより早く明けてしま

五

京さんが菊松からの消息を得たのは實に其の翌々日であつた。鬢の後毛一ッないまでに、いやにわざとらしく髪を奇麗にして現れた菊松の顔を見ると、矢庭に京さんは飛びついて引摺倒してやりたい位に氣の急くのを、わざと痩我慢して、惡く落ち付いた風を見せると、菊松の方でも其れ相當の覺悟があつたのか、男がまだ口をきかぬ先きに、「實はね、京さん、斯ういふわけなのよ。まア怒らずにお願ひだから聞いて下さいよ。」と無理やりに男の膝へ凭れかゝつて、如何にも其の

つたのである。

白狀する通りらしく其の夜の顚末をさらりと淀みなく打明けた。お茶屋さんと家の姐さんとに賴まれて、退引きならぬはめになつて私一人ならば一晩だけで歸るつもりの處、姐さんの旦那や何かも一緒の爲めに、どうする事も出來なかつたのだとの事である。そして、「さう云ふ譯なんだから、ね、京さん。私とお前さんの仲は屹度今まで通りよ。」と云ふ。で、京さんは其の夜の中に見事たわいもなく軟化してしまつた。

けれども其後菊松は兎角に遠出し勝ちである。此の次には何日の何時頃にと約束して置いた其の夜さへも、どうかすると出たなり歸つて來ぬばかりか、三日も四日も座敷が貰へぬといふ其等の數ある失態の上句の果に、菊松の口からは大阪の年寄つた商人で東京へ出て來ると、呼びつゞけに呼ぶ野暮な客だと云ふ事にな

つてゐた其の相手は、豈計らんや、丁度京さん位の年頃の、而も金のありさうな色の白い好男子であるらしい事が露見した。或朝京さんは天賞堂へ買物に這入つた二人の姿を、てつきり見屆けてしまつたのである。無論其の前にも一度國民新聞の花柳だよりに、六號活字の三行ばかり、菊松は此頃赤坂邊の華族樣を手取にしてゐるとか云ふ噂が出てゐた。それかあらぬか、貰へない座敷を無理に中貰ひして呼んだ晩、京さんは菊松の藥指には今まで見なかつた大きな〳〵ダイヤの指環が燦然たる光を放つてゐるのを認めた。

「おや、菊ちやん、そんな指環を持つてゐたのか。」

「これ？大阪に買つて貰つたのよ。厭なお爺さんにつとめるんだもの。此の位の事して貰はなくつちや。ねえ、あなた。」

京さんはいよ〳〵此の畜生と腹の立つだけ、猶更とぼけて、「幾歳になるんだい、そのお爺さんて云ふなア。四十か、五十か。」

「五十八ですとさ。いやだわねえ。」

「まア辛棒するさ。己がもう少しどうにかなれば……家の親爺でも死んでしまへば、ちつとは何うにかなるんだけれど、お前も己にや愛想が盡きてゐるだらうね。」

「あら、またそんな……私や初めッから京さんに頼んで、どうの斯うのして貰はうッて、斯うなつたんぢやなくッてよ。隨分いやなお座敷も勤めな〻つちやなら無いんですもの、可愛いと思ふ情人の一人や半分なくつちや。壽命が縮まッちまふわ。」

と云つて菊松は他の藝者のやうに役者や藝人見たやうな薄情なものに血道を上げる氣にはどうしてもなれない。それだから堅氣のちやんとした人で、何も彼も承知してゐてくれる――つまり京さんのやうな物のわかつた人を色にしてゐたいのだと云ふ事を、情を含んで喃々として語り續ける。然し京さんは何を云やがるんだ。慾徳なしでと二口目にはいやに人を色扱ひにしやがるけれど、此れがつまり此の女の手なので旦那の來ない晩なんぞも、商賣をしてゐる以上は、一夜たりともお茶をひかないやうにとの、まさかの用心に、最初から金のないお客は金のないやうにと大概の價踏をして居やがるのだ……と腹の中ではすつかり判斷をつけながら、京さんは口説きつゞける菊松の唇の絶えざる開閉につれて、折々小さな舌の先が白い齒の間からちら〳〵動くのを、不思議さうに眺めて、互に寄

添つて握り合ふ女の手先のダイヤモンドをば、指でグルグル廻して弄びながら、菊松の云ふ話を默つて聞いてゐた。する中にどう云ふ拍子か、ダイヤの指環は菊松の細い藥指から拔けて、コロリと疊の上に轉がつた。

「あッ。」

これは菊松と京さんと兩人同時に發した輕い驚きの聲である。然しそれをば最初に拾ひ取つたのは京さんの手であつた。指環はつまり菊松の指から、それを弄つて廻してゐる京さんの指先を經て、京さんの膝の上をつたはつて、而して疊の上に落ちたからである。

「よく輝るなア。」と京さんは取上げて電氣燈の光に翳して見ながら、「隨分大きいぢやないか。幾何位したんだい。」

「あなた……。」と我れ知らず訴へるやうな調子で菊松は京さんの質問に答へるよりも、先づ縋るやうに其の袂を引いた。菊松の此の樣子や顏色には誤つて火鉢の中へでも落して吳れぬやうに、萬一の間違ひのないやうに、何でもいゝから早く元の私の指へ嵌め返して下さいと云ふ、寶石に對する女性の眞情が溢るゝばかりに、あり〳〵と現れてゐた。と見て取るや否や、京さんは此の女に對して雪の夜以來の鬱憤を、もうどうしても押へてゐる事は出來ないと感じた。此の大きな見事な眩しい指環を得々として買つてやつた若い富んだる華族の姿と、それを買つて貰つた時の菊松の樣子ばかりか心の底までが、髣髴として京さんの眼の前に現れた。京さんは春まだ寒い三月の夜の小座敷を暖める火鉢の底も通れとばかり、其の中へ叩きつけてやりたい處を、まさかに然うもならず、ぢつと指環を掌の中

に握り潰して、引かれた袂を手荒く振り拂ひ、
「大丈夫だよ。見たつて減りやアしないよ。」
菊松は池の縁に遊んでゐる赤子を遠くから見るやうな心持で、詮方なしに默つてしまつた。
「僕にや似合ないか知ら。」と京さんは面白半分、からかひ半分、すこし堅いと思ひながら、ぐいと力まかせに左の藥指へさし込んで、再び電燈の光に翳して見た。
その時女中が襖の外から「菊松さん電話です。」
「そら又お爺さんの御催促だ。中貰ひだから行かなくッちや成るまい。構はないよ。僕は歸るから。」
京さんは指環を拔いて返さうと思つたが、無理に力任せに入れた指環はなかな

か拔けさうにもない。
「あ痛……。これア大變だ。」と京さんも少しく驚いた。
「菊松さんお電話ですよ。」と別の女中の聲がする。
「はい。お世話さま。」菊松は電話口へ下りて大分長く話をしてから戻つて來たがまだ指環は京さんの指から取れずにゐるのである。眞實取れないらしい事は、京さんも今では顏を眞赤にしてゐる上に、唾をべた〳〵に塗つけた藥指は猶更眞赤に脹れ上つてしまつて、而も指環の間へる骨の處の皮膚には血がにじんでゐるのを見ても分る。
「困つたなア。どうしよう。あゝ痛い。ぴり〳〵する。」と額からは汗を出して、京さんは溜息をつく。菊松はもう泣きさうな顏付になつた。

女中が出て來て、金盥に湯を運び、石鹼で洗はして見たが、洗へば猶更指がふやけて太くなるばかり。ピン付けも椿油も、氣が急けば急くほど駄目である。かくする中に中貫ひを急がす電話は、二三度に及んだ後、内箱の婆が今がたお帳場まで樣子を見に來て歸つたと云ふ始末である。車はとうに格子先に待つてゐる。

最後に内儀が中へ這入つて、此の場合取れないものはどうにも仕樣がない。まさかに京さんの藥指を切つてしまふ譯にも行くまいから、菊松の方では今夜の處はお客樣の方へ對して、そこは昨日今日弘めをした藝者でもないから、何とかいいやうに拵へて置く。京さんの方は後でゆつくり内儀が手傳つて女中も共々家中總がゝりで再び指環を拔きにかゝる。若しそれでも拔けない時には、明日の朝早速お醫者樣へ行く〳〵と云ふ事に話がついた。

六

ダイヤモンドの指環はとう〳〵其夜の中には取れなかつた。京さんは翌日醫者の處へ行つたけれど、昨夜あんまり無理な事をした故か、骨を痛めて熱を起し、其の爲めに指環を取るどころか一寸觸つても飛び上るほどの痛さに、其の儘靜に昇汞水で冷してゐる騷ぎだからと手紙で書いてやつた。返事が更にないので次の日の夕方電話をかけて見ると、前々夜からのお座敷が引つゞいてゐて、まだ家へは歸らぬとの事。三日四日五日と消息なしに日數はたつて行く。京さんはもう菊

松が死なうと生きやうとそんな事は乃公の知つた事ぢやないと云ふやうに、唯だ獨りで藥指に殘つたダイヤの指環を眺めて、此の位の大きさぢやア……と窃かに其の値踏をしては痛快に感じてゐた。然しまた三日四日五日と、遂に其の夜から數へれば彼れこれ十日程、菊松の方からは何の消息もない。

藝者から指環を卷き上げたまゝで、まさか此の儘にも濟むまいと、少し心配になつて、京さんは内々で樣子をさぐる爲め、いつもの待合に行つて聞いて見る最初は一寸云出しにくさうな内儀から、又しても意外な事實を聞かされた。菊松は已に二三日前に話がついて、萬事物費の少いやうにと、この節の藝者衆の事だから、親元身受と云ふ事で人知れず引いてしまつたとの事。お客樣は云ふまでもなく指環の華族樣であらう。

はゝア。それで判つた。と京さんは膝を打つた。もしか此の乃公が野暮な事を云ひ出して騒ぎ立てた日には、あんな惡足があつてはと、大事の鳥を逃がす恐れがあるので、奴め一生の智慧を振つて指環は盗まれたとか落したとか云つて、一方を胡魔化し、又乃公の方にはだんまりで、齒を喰ひしばる程に殘惜しい品物も催促が出來ずに、其の儘どろんをきめやがつたのだ。京さんは菊松の仕打を無念と憤るだけに、自分の指に殘つた指環をば此の上もない腹癒せにしてながめやるのであつた。

京さんの藥指に輝くダイヤの光は忽ち友人間の評判になつた。大したもんですねと云つて聞く人があれば、京さんは憚る處なく其の顚末を物語つて、そして何時もかう云ふのである。「乃公アかう見えても銀座の土地ッ子だア。今時の水轉な

んぞに甘く見られるなア業腹だからね。然し罪な事をしたよ。」

けれども暫くすると京さんは何を感じたのか突然藝者なんぞいぢめたつて始まらないやと云出して、軈て天賞堂から其の指環と同じ位な價格のブロッチを買ひ、「あの指環はそなたの形見にとあのまゝ頂戴いたします。此の品は御成功のお祝ひまで後れ走ながら、何卒お受取り下され度く候。」として現在の居處が分らぬから菊松の元ゐた家へ屆けてやつた。蓋し其のブロッチの代金は店の番頭に泣きついて無理やりに才覺して貰つたのださうである。

京さんが見合ひもせずに結婚して、けろりと代つた人のやうに堅くなつてしまつたのは其の翌年の事である。

風邪ごゝち

梅一輪一輪づゝの暖かさ。春の日向に解けやすき雪の中裏なか〳〵に、憂き事つもる假住居。それさへ兼て米八が、三筋の糸し可愛さの、女の一念眞實に、思込んだる仕送りを、請けてその日の活業は、世間つくる丹次郎……

一

と差向ひの置炬燵。男が中音に讀み聞してゐた「春色梅暦」の一節は、突然梯子段の下から鳴り出す消魂しい電話の鈴の音に遮られた。

女は今朝方からの風邪心地、悪寒を凌ぐ八反の褞袍の襟に埋めた其頤を起し、眉を顰めて、聞耳立てる間もあらず、勝手の方からは障子の開閉物荒く、あわてて馳け出る下女の足音。やがて梯子を二三段みしみし踏み鳴し、

「姐さん。揚箱からもうお仕度に上つてもよござんすかつて。」

「もうそんな時間かい。」いかにも驚いたらしく女は用箪笥の上の置時計を顧みたが、男はいつもより今日は又一層朝寐した冬の日の短さは斯くもあらうと以前から覺悟してゐたやうな沈着いた聲で、「もう五時なんだね。」と掛蒲團の下から煙管を捜り出しながら、「お前。心持はどうなんだい。何なら一晩位、無理をしないがいいよ。」

女は默つて考へてゐたが、梯子段の欄干を片手につかまへて、下から顔を出してゐる下女に心付き、「今すぐ此方から電話をかけると然う云つてお置き。」

下女は再び頑丈な足音をさして姿をかくした。

「三日も前からのお約束なんですからね。それに地の事で春若さんからもくれぐれ頼まれてるのよ。」

「春若が踊るのか。いゝ度胸だね。」

「私の地ならわざ〳〵手合せしないで濟むからつて……昨日も電話で念を押されてるんですよ。困つたわね。」

「一體、心持はいゝのか悪いのか。」と男は手を差伸して女の額を押へる。

「まだ熱があつて？」

「うむ。少しあるやうだね。」

「わるいでせうか。」

「わるいにやア極つてらアね。お前は兎に角あたり前の人の身體だと思つちや、大間違ひだぜ。」

「ほんとうね。去年から見るとまた痩せた事よ。もう後何年位生きられるんでせう。」

女は氣味惡いほど沈着いた調子で云つたが、男は最早それには答へなかつた。そして女の視線から避けるやうに置炬燵の上なる梅暦を開閉ちしつゝ、處々の挿繪をさがして眺めてゐた。かう云ふ差向ひの傷しい沈默は、日に一度か二度は必ず二人の間に襲ひかゝつて來るのである。けれども二人は、云はばもう馴れ切つて仕舞つたと云ふやうに、初めの中は實に堪へられぬばかりの悲痛に覺えず涙を

浮べた事も度々であつたし、又中頃はお互によしない事は口にせぬやうにと、出來るかぎり氣をつけてゐた事もあつたのであるが、遂には凡ての事を成行次第にまかして仕舞つて、敢て事新しくは悲しまぬやうにまで立到つてゐるのである。悲しいと思ふことがあれば、あるだけ、故意と反抗的にそれ等の悲しい事を云つて見て、せめての腹癒にするのである。

思へば一昨年の秋の事であつた。まだ自前の增吉にはならずに、玉扇屋から分て出てゐた時分、急性の肋膜炎にかゝつた後、女は不治の肺病といふ醫者からの宣告を受ける身となつた。然しこの一大不幸はその當時の增吉の身に取つては、同時にまた幾分かの幸福をも齎し來る原因ともなつたのである。四五年に渡つて增吉を世話してゐた旦那は、增吉が肺を惡くしたからと云つて、流石に薄情な切

れ方もできない處から、入院中の手當一切を支拂つてやつた上に、猶若干かの見舞金をやつて、此の後も商賣をつづけるなら、奇麗に呼んで贔屓にするとの事。

又抱え主の玉扇屋では、煉瓦地の狹い二階に四五人の抱えと、これから仕込んで出さうといふ子供の二三人も、ごた〳〵に雜居さしてあるので、若し傳染りでもしてはといふ見え透いた事實をばそれとは云はずに、唯だ增吉の方さへ其の心持ならば今までの借金は月々出來るだけを入れる事にして、自前の看板を分けてやらうとの事であつた。增吉は抱主と旦那とからつまり敬遠主義を取られた事を能く承知しながら、寧ろそれをば有難いと嬉しく感じた。

外の理由ではない。增吉は丁度其の當時、同じ家の朋輩に對して、藝者したものでなければ分らない藝者特有の意地として、縱へどんな無理をしても早晩自前

の看板を出さねばならぬ時期に迫られてゐたからである。玉扇屋から出てゐた藝者の中で一番古顔の姐さん株と云へば、增吉と小兼との二人で、後の三四人は皆二三年も後れて弘めをした二十前後の若い子ばかりである。小兼と云ふ意地惡は五年前の同じ年、增吉よりも三月ばかり晩く弘めをしたのであるが、好い旦那がついて、已に三月ばかりも前に立派な自前になると同時に、抱への二人まで置いて貰つて、豪儀な姐さん面をし出した始末に、日頃から何かにつけて自然と競爭の地位に立つてゐた增吉は、自分から世間を狹めて、寧そ外の土地へ住替へしようかと思込んでゐた矢先、病氣に取りつかれて仕舞つたのである。

それ等の事情に加へて、茲にまた一層增吉の嬉しく思つた理由は、此れまでも度々新聞などに書かれて旦那をもしくじりかけた程思ひ込んだ男をば、自前にさ

へなれば、自由に自分の家へ引入れて夫婦同様に暮されるといふ事である。増吉は其の思ふ男が萬一病氣が傳染したつて、戀の爲めなら命を捨てゝも惜しくはないと云ふに到つて、一夜を涙に明すほど嬉しく思ひ、まだ病み上りの血色もすぐれぬ中から、二人して金春、仲通り、板新道から信樂新道と、それ〴〵に名のついた横町や露地の貸家をさがし歩いて、丁度今から一年ほど前増玉扇といふ新看板を掲げたのであつた。

「足掛け二年になるわね。斯うして一緒に暮してゐられたんだから、もう私やいつ死んだつて、實際のところ思殘りはないのよ。」

増吉は默つてゐる男の顏を覗き込むやうに、炬燵の上に前身をのしかけた後、退儀らしく立上つた。長らく此の社會に沈倫してゐる男は、藝者と云ふものがお

座敷の掛つた其時に抱く一種特別の感情をば飽くまでもよく了解してゐるので、其の眼は依然として梅暦の挿繪を眺めたまゝながら、獨語のやうに、

「それぢや、早く行つて、早く歸へて來るさ。」

「でも、無理をして又どつしり寢込むやうだと困るわねえ。」

「だからさ、風邪でも引いた時なんぞは、順當な身體ぢやないんだから、後口へ廻らうなんて慾を出しなさんなと云ふのさ。」

「なんぼ私が向見ずだからッて。」

増吉は調子だけ腹立しさうに云ひすてゝ、梯子段の下口から「政や。」と大きく女中を呼んで、「揚箱へ電話をかけてをくれ。そろ〴〵仕度に來てもいゝから。」

一足ばかり梯子段を下りかけたが、突然立戻つて用簞笥の曳出から小菊の紙を

取出し、空解けの伊達卷を引きしめながら、增吉は降りて行つたが、再び上つて來ると、直樣電燈を向うの方へ引張つて行つて、窓際に据ゑた鏡臺の前に坐つた。下女が癖直しのお湯を持つて來る。增吉はもう今朝からの風邪心地をも、今日一日は湯にも行かずに頭痛がすると云つてゐたのをも、萬事は全く忘れ果てゝ仕舞つたやうに、あるかぎりの全身の魂と精力とを鏡の中に打込んで、火の氣の乏しい裏二階の、しかも二月の大寒の夕まぐれと云ふのをも更に頓着する氣色なく、くるりと兩肌をぬぎすてたのである。そして電光石火の如くに挿してゐる櫛と簪と髱留などを拔き取るかと思ふと、前髮の中と兩鬢の翼の下に入れた梳毛の珠とを取り出し、熱湯にひたした布片を摘んで適度に絞るや否や、髮の毛は根元からも拔け落ちよとばかり、力任せに兩鬢を揉んで擦つた。

男は電話を掛終つた下女が姐さんの長襦袢を炬燵へかけに來るのを機會に、少し後じさりに後方の壁に背をよせかけ、半は感嘆に半は傷しさに堪へぬ樣な目容で弱々しい撫肩に貝殼骨の痩立つて見える後から、その化粧するさまをばぢつと打目戍つた。無論二人ともに交すべき話もない。話をしかけたとて、男は女の髮に氣を取られた時には碌々返事をする餘裕もない事を承知してゐるに於てをや。外には日暮を急ぐ下駄の音。人力車の鈴、羅宇屋のピー〳〵、齒入屋の鼓の音。此方は折々ぢれつたさうな舌打の響につれて、明放した鏡臺の曳出しの幾個と知れぬ櫛や毛筋棒の中から氣に入つたのを取り出さうとする手荒な物音と共に、風邪心地の寐亂れた銀杏返しは、昨日の晝過ぎこの土地で老手のお若さんが結つた時のやうに變つてしまつた。髱は長く肅然として金鷄鳥の尾の如く、意氣な柔

味の中に幾分の氣品をさへ帶びて、浮立つやうに鮮かな襟足から稍々蒼白い頸の上に伸び、兩の鬢は左右から挿す毛筋棒の上に、水櫛の齒の曲線を鮮かに、ふはり休んでゐると、前髪は凛として勇ましく額の上に直立し、髷の兩輪は電燈の光を浴びて漆のやうな輝きを示してゐるのである。

然し增吉は、恰も己れの製作品を眺めやる美術家が、此れで滿足したのではないが、滿足して置くより仕樣がない、手をつけ出すと切がないからと云つたやうな、寧ろ遣瀨ないやうな目容で、合鏡の一瞥を終つたかと思ふと、一秒間の休息もせずに、今度は白粉下の花筏を取つて溢るゝばかり掌のくぼみにつぎ、兩手で顏から頸から、咽喉から胸から、肩の後も手のとゞくかぎりべたべた塗りつけた後には、つゞいて御園白粉を水刷毛にしたして目も鼻もないやうに一面に塗り

立て、しよぼ〳〵瞬きする睫毛と眼の緣を手拭でふき、次には粉白粉のついた大きな軟い毛の牡丹刷毛で、鼻の上から、顏中襟元、耳朶の後まで、水白粉の濃淡のないやうに磨きをかけた。

「箱屋で御在ます。」と云ふ聲と共に格子戸のあく音。下女は周章て梯子段を駈け上り、

「姐さん。お召はどれを出すんです。」

增吉は頰紅を淡くぼかして、樂屋使ひの引眉毛を施しながら、

「さうだつたね。あなた、鳥渡その引出の中の帳面を見て下さい。」

「二十五日……島屋さま……五時。」と男は女が覺書の帳面を讀みにくさうに讀む。

「へい。今晩は。どうもお寒う御在ます。」と唐棧の羽織に同じやうな着物の裾を端折つた四十年輩の、頭をくる〳〵と剃つた揚箱の男は、幇間や落語家などに見るやうな、何處となく角のとれた腰の低い態度で、梯子段を上りきつた壁際に小さく身を寄せて膝をついた。

「爲さん。着物は出でなくつても可かつたんだね。」

「へい。別に何ともついちや參りません。」

「それぢや、あのお召の……雪輪の裾模様を出しておくれ。」

增吉は下女に命じながら音高く鏡臺の曳出を閉めると共に、白粉のこぼれた寢衣の膝をぱた〳〵と拂いて立ち上つた。箱屋の爲さんも同じく坐を立ち、增吉が新しい足袋をはき替へて立直るや否や、下女が取出す置炬燵の長襦袢を引取つ

て、後から着せかける。增吉はその裾を踵で踏へながら、縫模様の半襟をかけた衣紋を正して、博多の伊達卷を少しは胴のくびれるほどに堅く引き締めると、箱屋は直ちに裾模様の二枚重を取つて、後から着せかけて置いて、女がその襟を合せてゐる暇には、もう兩膝をついて片手では長く敷く裾前を直してやり、片手では薦の上なる紋羽二重の長さは全一反もあらうと云ふしごきを、さッと捌いて其の端を女の手に渡してやつた。着せかけるにも、着せられるにも、共々に飽くまで專門家的の熟練と沈着とが備つてゐて、聊かの混雜も澁滯もなく、凡ては輕妙に迅速に取扱はれて行くのである。

この年月、見馴れに見馴れた事ながら、男は流石に始終肱枕の眼を離さず眺めてゐる中、これも今夜初めてと云ふではないが、藝者がお座敷といふ一聲に、病

を冒して新粧を凝らし、勇ましくも出立つて行く時の樣子は、恰も遠寄せの陣太鼓に戀も涙も拋つて、武智重次郎のやうな花武者が、緋縅の鎧美々しく出陣する、その後姿を見送るやうな悲哀を催させるものだ……と思つた。

箱屋は袋につゝんだ三味線を持つて、這入つて來た時のやうに腰をかゞめて出て行くと、增吉は男の傍に膝をつき、締めたての帶の間から、今挾んだばかりの煙草入を拔き出しながら、

「お化粧したら却つて氣がさつぱりしたやうだわ。それぢやア、私行つて來ますよ。早く貰つてすぐ歸つて來るから、待つてゝ頂戴よ。晩の御飯一人で食べちまつちやアいやですよ。」

「姐さん。車が來ました。」と下の方で下女の聲。

男は半身を起して唯だ頷付いてゐると、女は其の手を輕く握つて、「お腹が空いたら、私の牛乳があるから、あれでも呑んでお置きなさい。」それから何ともつかずに唯だ、「よくツて？」と嫣然して見せて、增吉は褄を取つて梯子段を下りた。

直樣切火をかける音が聞える。男は再びごろりと置炬燵へ肱枕をして、大きな長い欠伸をしながら、置時計を眺めると、丁度六時を指す針と共に、其の中に仕掛けたオルゴールが點滴の落ちるやうに懶く、「宮さん〳〵お馬の前で。」を奏し出した。

二

日の全く暮れ果てた屋外の寒さは、建付の歪んだ西洋窓の隙間から、糸を引くやうに侵入して來る。男は仕様事のない退屈しきつた身體を如何にも持扱ひかねると云ふやうに起き直らして、再び置炬燵の上に梅暦を開いたが、もう挿繪を見るのでもなく、唯だ茫然と電燈の光に照らされた亂雜な二階の身のまはりを眺めるのであつた。たつぷり夜になると共に、電燈の光は屋外の薄明かつた夕方よりは、幾分か其の力を増したらしく、四邊一體を何ともなく新しく見せるやうに思

はれたからでもあらう。

俗に三等煉瓦の貸長屋と云はれてゐる此の家の二階は、今日では明治初年を追想させる荒廢した一種の紀念物とも見られるだけに、不思議な程拙なく不便に出來てゐる。立てば丈身の屆くほど低い天井は紙張りにしてある爲めに、二目とは見られぬばかり、鼠の小便と雨漏りの斑點と、數知れぬ切張りとに汚され、間數は襖を引き得べき敷居の溝を以て境とすれば三間と數へられるのであるが、梯子の下口の一間と、それに續いた次の間とには、丁度西洋室の暖爐の煙筒を見るやうな太い煉瓦の柱が突出してゐる爲めに、孰れも二疊半に三疊半と云ふやうな不思議な疊の半數を示してゐる。他の一間だけは稍廣く八疊ほどの疊が敷かれてあるが、後から付出した一間半の押入がこゝにも亦邪魔らしく突出してゐる上に、

次の間を區切る敷居の上には、どう考へても解釋のつかない、飛んでもない處に、細い柱が然も二本並んで立つてゐる。最初男は增吉と二人で此の貸家を見に來た時、猫に爪を磨せる爲めわざ〳〵こんな柱を立てたのぢやないかと云つて、笑つた事があつた。

男は一昨年の秋から毎夜々々同じ電燈の光で、增吉のお座敷へ行つた後一人でぼんやり眺め廻す三間打通しての此の二階をば、今夜もまた仕樣事なしに眺め廻すにつけて、此れもまた毎夜のやうに、自分の身の行末はどうなるのであらうと、矢張同じ事を思ひつゞけるのである。近所の女達から兄さんとも旦那とも或は單に進さんなぞとも呼ばれずに、歷とした祖先の姓を名乘つて、親の家から丸の內の會社へ通勤してゐた時分には、凡て正當なる事は馬鹿々々しく思はれ、一日半

日の怠惰をも許さぬ職務の束縛には遂に堪へられずして、恰も日に解される雪達磨の下から次第に崩れ出すやうに、この藝者家の二階に主人同樣に入りびたつては、あまりに爲す事なき退屈の折々には仕舞つたのであるが、それも今になつて自分から拋つた規則正しい生活の活氣ある勇しさを、成程返つて來ない昔の夢だと追回して見たくもなる。けれども男は直樣、かうまでに持ち崩してしまつた現在の身體では、唯でさへ根氣の續かなかつた勤勉な生活抔には到底復歸されるものではあるまい。寒い〳〵冬の朝目覺し時計に起されて慌忙しく洋服を着る辛さ。雨の降る堀端に電車を待つ果敢さ。乘つてからは雜踏の苦しさ。それから漸く會社の入口を潛れば、人々皆それ〴〵の階級に從つて、其れ相應に立身出世の野望をば、唯だ謹直と云ふ名の下に押隱して、凡そ人間の多く集る處には必ず免れが

たい反目やら競爭やら阿諛やら讒訴やら、其れ等一切の不快な隱險な感情をば亦もや交際と云ふ假面の下に何事もないやうに包みかくして行く。そんな事を思ひ出すと、こゝに斯うして藝者家の二階にごろついてゐる現在の方が、どれだけ幸福だか比較にはなるまい。會社の人達が蟻のやうに働いて、明けても暮れても、月給と賞與金との增額をのみ夢みつゞけるのも、其の最終の目的は榮華と安樂に耽りたいと云ふに過ぎない。詩人でもなく仙人でもない吾々の安樂榮華とは、つまる處美衣と美食と美人とに圍繞されたい事を意味するのであらう。然りとすれば、自分は社會的名譽を拋てた報酬としては已に業に餘りある程の安樂を得てゐるではないか。惜しむ事は無い、悔る事は更にない……男は重ねて二階中から自分の身のまはりを見廻した。

押入と相對した一方の壁際には、新しい桐の簞笥が二棹と、時代の知れぬ程古びたのが一棹と並べてあつて、其の上には用簞笥やら箱入の人形やら羽子板やら稽古本を入れる見臺やら、其の他さま〳〵な玩具や小道具が、天井の片隅なる酉の市の熊手や、穴守樣の河豚の提灯なぞと一緒になつて、どう云ふ譯か堅氣の家には決して見られない艶しさを帶びて見える。向うの窓際には大小の鏡臺があり、此方の窓に添ふ壁には、お召の不斷着が古びた長襦袢を重ねたまゝ、だらりと下つてゐる。置炬燵の掛蒲團が古疊の上に其の花やかな更紗模樣を延べた端には、紋縮緬の裏をつけた八反の褞袍と、浴衣を重ねた絹の寢衣とが細帶と共に、脫ぎすてたなり、其の襟のあたりの處なぞは丁度藻脫の殼のやうに女が着てゐた時の儘の形さへ殘して、花薦の上に狼籍としてゐる。見廻す二階中の壁と疊と天

井のいたましいまで古びた汚れ目に對して、いかにも優しい其等の家財道具と見るからに艶なる女の衣類は、全く一致しない各自の特徴を互に鋭く引立たせ合つてゐるので、それをば同時に眺めやる男の心には、いつも斯うした藝者家の二階といふものに對して、一ッは放蕩の身の末の尾羽打ちからした哀傷と、又一ッには云ふに云はれない柔かな住心地を感じさせるのであつた。それは今夜のやうに女のゐない留守の間に於てさへも、其のぬぎ捨てた衣服のさま〳〵からは絶えず一種の重い生暖い氣が吐き出されてゐて、譬へる事のできない程手觸りよく、男の身を蔽ひ包むやうな心持とでも云はうか。この快感と同時に古びた家から感じられる彼の哀傷とは、常に相混和して、遂に〳〵今ある如くに男の良心と、男が誰でも持つてゐる生活に對する固有の奮闘力とを根柢から麻痺させてしまつた

ので、男は此の頃になつて朝湯の行き歸りなぞ、女着を仕立直した半纏を引掛けて戸外へ出る折々、横町の彼方に見える銀座の大通の忙しさうな生活を傍觀してさへも、何となく其の空氣の荒々しさに堪へ得ぬやうな心持がして、直樣この二階なる絹の柔かみと白粉の匂ひの古巣へもぐり込んでしまふのであつた。さればは何うにも斯うにもならぬ程じたらくに持崩してしまつたわが身の成行の、寧そ早く片が付いてくれる事を絶望的に希ふ爲めに外ならぬ。否、男は死といふ事よりも今は、増吉が先きに死んで自分ばかりが無病息災で後に殘されたら其れこそ見じめなものだと氣遣はずにゐられないのである。

三

自働車が二階の簞笥の環をゆすぶる程、恐しい地響を立てゝ通つた。裏隣りになつてゐる小待合の二階からはサノサ節を歌ふお客の聲が聞え出すと、横町の彼方からは、「これは今年の九星八卦よみに御在ます……。」といふ皺枯れた讀賣の聲が近付いて來る。下女が澤庵臭い嚔をしながら增吉の寢衣を炬燵へかけに來た。

「大分腹がへつて來た。何かないかなア。」

男は振向くと、斯うした稼業の家には年久しく使ひ馴らされた三十前後の下女は、わざと調子をすげなくして、「旦那一人に先へ御飯なんぞ上げると、後で私が姐さんに叱られます。」

「だつて食はずにや居られないぢやないか。此間の雀燒はもうなくなつたのか。」

「もう暫くだから御辛棒なさいよ。姐さんだつて樂しみにしてお腹をすかして居らつしやるんぢや有りませんか。」

下女は丁度物馴れた新造が若いお客をすかすやうな調子で答へながら、其の邊を取りかたづけて階下へ行つてしまつた。

同時に電話が鳴出す。男はまだ少し時間が早過ぎるけれど、もしや增吉がお座敷から迎ひの車を寄越せとの事ではないかと、取次ぎに出る下女の聲に耳に濟し

たが、矢張り豫想通りさうではなくて、他のお茶屋から明日の何時にお約束といふ電話であつた。

「旦那。」と階下から下女が聲をかけて、「あちらへ直ぐ通して置きませうかね。」

「受けてしまつたのか。」

「いゝえ。唯今お座敷ですからと云つて置いたんですよ。」

「さうかい。そんなら出先へさう云つてやつてお呉れ。」

かく吩附けたものゝ、男は家の下女からまで、そんな商賣のお座敷に關する相談なぞ仕掛けられたくないと云ふ心の苦痛を、眉の間の皺に現はさずには居られなかつた。自分より外には誰もゐない二階の中ながらも、猶人に見られはせぬかといふやうに、其の顏をさへさあらぬ方に外向けさした。下女は增吉がお座敷へ

出た留守に起る家業の用事や掛引の少し込み入つて來る場合には、其の挨拶や返事のしやうをば、「旦那々々。」と云つては何時としもなく男に相談しかけるのも、思へば既に久しい以前からの事であるのだ。實は男も最初は面白半分に增吉が稼ぐ玉帳の總高を算盤にはじいて見るやうな事も無いではなかつたが、いざ全くの無職業の身となつて、二階にごろ〳〵してゐるより外には仕樣のない現在に至つては、時に觸れ物に感ずる折々、云ふに云はれない慚愧と苦痛の念に迫められてならぬ事がある。

休みなく鳴し立てる電話の鈴の音につゞいて、階下からはまたもや下女の聲。

「旦那。困つてしまひますよ。電話がいくら掛けてもお話中なんですよ。」

男は今度はもう答へなかつた。今方火を入れ直した炬燵に燒き立てられる苦し

さに、男は坐りくたぶれ寢くたぶれた身體を立ち上らせ、ゆるんだ帶を締め直したついでに、階下の便所へでも行つて置かうかと思ひついたが、突然又何か思ひ返したらしく、梯子段の下り口から窃と階下を覗いて見ながら、其の儘立戻つて座敷の眞中の細い柱に脊をよせかけてしまつた。階下の座敷といふのは元來は二階同樣の廣さであつたらしいのを、手で押せば直ぐに拔けるかとまで危まれる薄壁に境して、今の煎餅屋との二軒に後から分割したものらしく、僅かに三疊の一間も勝手道具のさま〳〵に狹められて下女一人やつと寢起きされるばかりになつてゐる。下女より外には誰もゐないのである。けれども男は其の三疊に置いてある長火鉢を見ると、左官職をしてゐる增吉の實父が、折々こゝへ酒を呑みに來る度々、極つて娘と口喧嘩を初める事から、つゞいて增吉が毎月その親に仕送る二

十圓の爲めに、優れぬ健康を犧牲にしてまで思はぬお客をさへ取つてゐるやうな祕密を連想せねばならぬし、猶其れよりも一層避けたく思ふのは、薄い隣りの壁越しに絶間なく聞える年寄つた煎餅屋の老母の咳嗽の聲である。それは何といふことなしに男の不身持を嘆いてゐる自分の母親の事を思ひ出させてならぬからである。

鍋燒うどん。焦立て豆やの呼聲と、支那饅頭の鈴の音に、横町の夜も少し更け出したかと思はれる頃、男はいつか又炬燵へもぐり込んで、獨りで淋しく、梅暦の痴話口說に强ひても興味を得ようと努めてゐる時、突然格子戸の外に車夫の聲がして、思つたよりも早く增吉が歸つて來た。

「政。すぐ御膳の仕度をするんたよ。」甲走つた聲と共に梯子段を踏む音が一段一

段上つて來ると、此方は幾分か待ち佗てゐたといふ弱點のあるだけに、瞬間に起る男の意地が自然とその場合、哥澤の文句にある通りな思はせぶりな空寐入をさせる。女は梯子段を上り終るや否や、襟卷を解き捨てながら歩みよつて、「早かつたでせう。」と小聲に云ひながら男の肩の上に身體を載せかけた。

氷のやうに冷えきつた絹の女着の冷さに頰を撫でられ、男は覺えず身顫ひして女の手を取つたが、「大變な熱ぢやないか。」

「脊中がぞく〳〵してとてもお座敷にゐられなかつたのよ。矢張無理をしたのが惡かつたんだわね。」力のない調子で申譯らしく男の顏を見た。

「だからさ。云はない事ッちやない。」

「もう叱らないで頂戴よ。私が惡かつたんだから。」と艶しく謝罪ると同時に、

女は又甘へるやうに其の不平を訴へて、「それでも今夜は一杯もお盃なんぞ受けやしなかつたのよ。この上身體をわるくしちや大變ですもの。いつだつて少し頂いたと思ふと、直ぐ内所で厠へ行つちや頰紅を薄く塗つて、酔拂つたやうな眞似をしてゐる位に、それア用心してゐるんぢや有りませんか。」

「だから、何もお前が好んで不養生すると云やしないぢや無いか。いゝから早く着換へておしまひ。何かよく暖まるもんでも食べて早く寢た方がいゝよ。」

「あなた。お腹が空いたでせう。もう一體何時です。」男の身體に凭りかゝつた儘で羽織を脱ぎ帶留の金具をはづしながら、置時計を見返つて、「九時過ぎたばかり……割に早いわね。」

「お醫者さまを呼ぶのなら、今の中に早く政に行つて貰つたらどうだい。」

「さうね……。」と考へて、「ほんのちよいと風邪を引いたゞけなんだから、此の間の頓服がまだ殘つてるから……。」

下の方から其の時強い葱鮪の匂ひが立ち昇つて來た。女は何も彼も忘れてしまつて、

「あゝ嬉しい。政やが葱鮪をこしらへたわ。」

「さあ早く脱いでおしまひ。襦袢一枚でどうするんだよ。」

「あッ。暑い。燒けどするわ。あなた。」

增吉は男が炬燵から取出して着せ掛ける寢衣の陰に、早や襦袢もない眞白な肌身を艶めかしく悶えさせた。

格子戸があいて箱屋の聲。「姐さん、もうお歸りで御座いますか。」

「どうも御苦勞さま。」暫くしてお政が香の物でもきざむらしい肴板の音がし出した。

二人は唯何といふ事もなしに顔を見合はすと共に、さも嬉しさうに笑つた。

名花

何々倶樂部と云ふやうな名のついた或る廣い會場で、何々研究會といふやうな名稱をつけた半興行的な催しのあつた折の話である。

東洋の文明がどうのかうのと云ふやうな御大層な趣意書のあとに、續いて書き列ねられた番組の通り、三曲の合奏、長唄、常磐津、新內などの間に交つて、下方まで、すつかり揃つて新橋藝妓連中の手踊賤機が始まつた。

見物はいづれも此の踊をば、當夜の番組中では第一の呼物として待ちかまへて

一

ゐたものらしく、紅白の引幕がまだすつかりと引きのけきらぬ中から、早くも雛壇の上に並んだ美形を眺めようとて、無遠慮にも席から中腰になつて立ち上るものすらあつた。新橋の藝者といふ名稱が持つてゐる魔力は恐ろしいものである。然しさうなると、何に限らずこゝに一種の反抗者、冷笑者の生ずるのも、亦自然の勢であらう。「藝者の三味線が聞きたけりや待合へ行くがいゝや」なぞと云ひながら、わざと騷々しく席を去つて階下の便所の方へ行くものもあれば、または斯う云ふ折を利用して、人込の空氣の蒸暑さを逃れ、休憩所でゆつくり茶を呑まうといふ連中も尠くなかつた。

計らず會場の中で出遇つて、今までは一緒におとなしく聞いてゐた自分の友達なにがしは、矢張この時、突然自分の袖を引いてそして振向く自分の顏をば、寧

ろ不審らしく眺めた後、「どうです。咽喉が渴いたぢやありませんか。お茶でも呑みに行きませんか。」

舞臺の方では既に囃子を入れた前奏の一節がすんで、今しも兩鬢のおそろしく拔け上つた澁紙色の老妓が、立唄の貫目をつけて、重々しく唄ひ出した。然しいかなる素人耳にも總じて女の聲の長唄を、かう云ふ廣い會場の明るい燈火の中で聞く時には、場末の小芝居の下座にも劣つて、妙に力拔けがして、間拍子のくぎりの付かないやうな、賴りのない心持のするものである。友達はもう癇癪に觸つてたまらないと云ふやうに、「まづいなア。」と舌打をして、今度は急き立てるやうに自分の顏を睨んだ。

自分はたいして避けたくもなければ、又たいして聞いてゐたくもない連中の一

人なので、促されるまゝに座を立つた。今まで人の頭で後からはよく見えなかつた舞臺の前側までよく見通される。立唄と立三味線と其の脇とは、いづれも年寄つた、此の種の女に見られる澁紙色の顔色をしてゐたが、上調子の三味線に笛、皷、太鼓の連中には、裾模様の色の華やかに、島田の髷も水際立つたものが目についた。自分達は會場の壁に添うて廊下に出ようとした時、舞臺の方では臨時に拵へた上幕から現れる鬘衣裳の踊子が、滿場の視線を奪ふ處であつた。

二

休憩所の椽側に腰をかけながら、何ともつかぬ雑談のしばし途切れてしまつた時、友達は膝の上に弄ぶ番組の印刷物を繰ひろげて見るでもなく出演者の名前を見てゐる中、ふいと何か思ひ出したやうに、自分を顧みて、

「君、この小鍛冶といふ藝者を知つてゐますか。」

「皷をやるんですね。」と自分は番組を差覗くと共に、今方瞥見した舞臺の樣を回想しながら、「いゝえ。知りません、綺麗な女らしいやうでしたね。新橋の名妓で

すか。」

「名妓……はゝゝゝは。」と友達は大きく笑つて、「面白い話があるんですよ。今の世の中は何でもあの調子で行かなくつちや駄目です。」

友達は現代の社會一般に對する嫌惡の、これも其の一例として、會場を出てからの歸途、次のやうな藝者の内幕話を聞かしてくれた。

さうですね、もう彼れ此れ十年にもなりますかね。私が初めてあの藝者を知つたのは、まだ大學にゐた時分の事で、あの女も其の時にはお君と云つて、湯島の小さな天麩羅屋の女中をしてゐたんですよ。まだ肩揚を取らずにゐた程の年頃でしたが、蛇は寸にして人を呑むと云ふ方なんでせう。年長の女中よりも酒は強い

し、男をあやなす腕に至つてはどうしてなか〳〵凄いものでした。今では法學士でさる地方の裁判所長をしてゐる男ですが、それが此のお君坊のいやにこまちやくれた淫らしい風に迷ひ込んで、散々生血を絞られたもんです。下宿屋へ轉げ込んで來て、是非未來の學士さんの奥樣にして下さいと云つて、泣いたり喚いたり、そしてどうでも望がかなはないのなら、不忍池へ身を投げるといふ騒ぎです。仕方がないから遂に私が中に這入つて、手切金の相談をして、やつとの事下宿を引上げて貰つたといふ始末。

その後お君は何處へ行つてしまつたのやら、私も友達も決してその消息を知りませんでした。細君にして下さいと強請んだ御本人の友達にさへ、お君は其の實家をば唯だ淺草の芝居町邊とばかり、兩親があるのかないのか、それさへも話の

斷片には漏さなかつたさうです。私も今だに當時のお君、今日では新橋の小鍛冶の血統については何事も知つてゐません。其の翌年私達は大學を出てしまひました。友達は間もなく地方へ赴任する。私は次第に墮落してぶらぶら遊び歩いてゐる中、計ずもお君に再會したのは、まアどこだと思ひます、公園六區の銘酒屋の戸口でした。其れから半年ばかりたつて私は新聞社に這入つたのですが、すると或日机を並べてゐる仲間の男か、濱町の優物だと云つて、自慢らしく示した寫眞――見れば間違ひもなく天麩羅屋のお君が三度目の變身です。私はその男から、濱町、蠣殼町邊の小待合に出沒する女の事をいろ〳〵に話して聞かされ、いつか一度案内して貰ふやうな約束までして置いたのでしたが、する中又もや間もなくその男は大分御熱心筋らしいお君が、突然行衞をかくして仕舞つたと云つて、大

いに悄氣返つてゐるので、其れなり私も濱町へは行かずにしまひました。

こゝに滿三年の月日がたちます。濱町の話をした新聞記者は運よく足を洗つて朝鮮へ行つてしまひ、私は他の新聞社へ轉々して、ある宴會の席上で偶然にも今度は四度目に藝者姿となつたお君を見たのです。

然しお君はまだ其時には、今のやうに小鍛冶なんて、變に姐さんぶつた名前をつけてはゐませんでした。若い便利な新橋の藝者にはよくある、花千代だの鶴龍だのかしくだのと何となく華魁か引込新造のやうに聞える名前を付てゐました。

――お君の名は花鳥と書いて其れを花鳥さんと讀ませるのでした。

お君の花鳥さんは思ひがけなく舊知の私と顔を見合せて、内心ぎよつとしたらしかつたが、呼ばれてゐる藝者の身として逃げもならず、と云つて默つても居ら

れず、始終恐る〻如く嘆願する如く、私の氣色ばかり窺つてゐました。無理もありません。これが澁谷か、公園か、津の守か、乃至は富士見町、神樂坂あたりならば知らぬ事、兎に角新橋といふ本場の土地で、而も其の扮裝は思ふさま張り出した庇髪に目のさめるやうな荒いお召縮緬、繻珍の丸帶と云ふ、どう見ても世間知らずの素人娘から、今日初めてお弘めをしたんですと云はぬばかり。若いと、綺麗と、柔順いとの三拍子を看板にしてゐるらしい矢先へ、天麩羅屋の姐さんから銘酒屋、濱町と渡つて歩いた經歴を素破拔かれた日には、身も蓋もない話ですからね。實際お君はどう見てもそんな恐ろしい境遇を通りぬけて來たものは思はれませんでした。初めて遇つた時から數へると、云はずとも、最う二十を二ッ三ッは越してゐる筈なのが、再び十六七の若いあどけない樣子になつて、お客のさ

す杯をも、「わたしちつとも頂けないのよ。」とさも困つたやうに、遣瀨なく唇をつけるだけにして居ます。

私はあまりに其の變裝假面の巧妙なのに、寧ろ多大の興味と好奇心を呼ばれ、御當人には氣の毒だと知りながら、その一擧一動に注目しないわけには行かなかつた。定めし、いけ好ない奴だと思つた事でせうが、何しろ先方は瑕もつ足の氣味わるさ、遂に度胸を据ゑたものと見え、丁度一座の宴席もそろ〳〵騷々しくなりかける頃から、忽ち最初の敬遠主義を一轉さして、今度は妙に馴々しく媚を呈し出します。隣席の生酔が、「君どうもお安くないですなあ。」なぞと冷笑しても花鳥は惡びれず、「だつて仕方がないわ。」と上手を打つ。便所へ立つ時にも、すかさず附いて來て世話をしてくれるといふ調子。つまり私を籠絡してしまはうと云ふ

のでせう。太い奴だと思ひながら、若い藝者にちやほやされるのは誰にしても惡いものぢやありません。殊にかう云ふ場合には酒と云ふ魔物が誘惑を助けます。騒々しい酒宴の席からは、罪の深い野心家がそろ〳〵隙を窺つて二次會へしけ込み始める。其のまた隙に乘じて、慾の深い婆藝者は、後口を受けた外の座敷へと逃るやうに消えてしまふ時分、私は誰でもがよくやるやうに、花鳥を廊下へ呼び出して咽き聞かせました。すると花鳥は、私をばそんな人ぢやないと思つてゐたのに、案外だと云はぬばかりの顔付をしましたが、今からさう狼狽てゝ、お客の機嫌を惡くしてしまはないでも、まだ〳〵、いよ〳〵、切破つまつた其の場合に立至つてからでも、逃げる手段は臨機應變にいくらも有らうからと、さすがは經歷の多いこの女の事、お茶屋の内儀に唆まれて唯だもう泣かぬばかりにべそをか

くやうな出たての子とは違ひます。花鳥のお君は、表面だけ羞恥を含んで、はんけちを口の端に弄びながら、どこか泰然自若たる樣子で、

「それぢや、あなた、一足お先へ行らしつて掛けて頂戴。すぐ貰つて伺ひます。」

「きつとだぜ。」と念を押して、私は云はれるまゝに一足先に料理屋を出で、唯ある横町の唯ある待合に行きました。そして花鳥の來るまでの間、私は其の家の内儀や女中を相手に、内々花鳥のことをきいて見ました。

「隨分よく賣れる兒で御在ますよ。藝者はあの位のところが一番世話が燒けなくつて、重寶で御在ますからね。」

「あゝ見えても、それ相應にお高く留つてゐるんだらうね。」

「なに、あなた。商賣ですもの。お客さま次第ですよ。」

「いつ時分から出てゐるんだい。」

「さう……まだ半年位に、なるかならずで御在ませうよ。」

やがて花鳥は、かなり暇を取らした後、わざと綺羅を張つて見せるつもりか、別の衣裳に着換へて、髪飾りまで取りかへて來ました。

女中は折を計つて早くも座を外す。私は花鳥と二人ぎり、狹い座敷に差向ひになつたが、さすがに以前の事――殊に友達から手切金を取つた一件なぞを今更口に出すのは、何となく氣の毒で、私はもう萬事忘れたやうな顔をしてゐると、向では案外にも、「葛田さんはどうなすつて……。」と突然友達の事をきゝ出すのです。

「○○縣の裁判長になつてゐる。」

「あら、さう……。」

「凄い腕を振つたね。あの時は……。」

少しは面憎くもなつて、私はかう云返してやると、どうでせう、花鳥は一寸身體に品を作つて見せながら、

「だつて、私、あの時にはほんとにあの方と一緒になりたかつたんですもの。逆上せるとすぐ夢中になつちまふんだから、若い時はしやうがないわね。」

「現在はどうなんだい。もうあんな男の事なんざ夢にも見やしまい。」

「夢に見るほど思つたからつて、もう始まりやしないわ。身分ちがひのものが、いくら思込んだつて、あなた見たやうな人が寄つてたかつて、生木を裂くんです

からね。」

「ふッ。今時分葛田が東京にゐたらどうする。」

「どうもしないわ。内所でせめてお顔なりと見に行くことよ。」

「馬鹿にするがいゝ。どこまで凄いんだか譯が分らない、到底太刀打ちは出來ない。」

「よして下さいよ。人聞が惡いぢやありませんか。」

今度はつんとして横向きに卷煙草を吸ひ始めました。

もと〳〵私は女の舊惡を詰る爲めにわざ〳〵此處へ呼んだのぢやない。偶然會つた宴會の席上で、何となしに媚を呈された迷ひ氣から醉に乘じて思ひ立つた事なんで、暫時沈默の後、「ねえ、花鳥。」と改めて呼びかけますと、花鳥の方もさり

氣なく、一般のお客に對する藝者らしい笑顔を此方へ振向けます。

「今までの事は一切云はない事にして、お互に今夜から改めてお知己にならうぢやないか。」

「えゝ、どうぞ……。」

何ともつかない雜談が、又一しきりつゞきます。私は再び切込んで見ようとその隙ばかりを窺つてゐますと、先方も矢張り馴れたもので、お座つなぎの雜談に時間を空費さして、他からお座敷の掛つて來るのを待つか、然らずば切破つまつて十二時の時間の來るのを待ち、そして家から迎ひの車の來るのを機會に、家ぢやほんとに姐さんが喧ましいんですからなぞと、體よく逃げようと云ふ計略らしい。そんな常套の手段には此方だつてまんまと載せられるやうなヘマではない。

花鳥も大に窮したと見えて、瓢簞鯰の挨拶の中に、つまり此處の家は馴染でないから、他のお茶屋から、もつと早く宵の口に掛けてくれとの事、そして自分の馴染のお茶屋といふのは、河内屋とか若松家とか、もつと格式の上な處である事をそれとなく仄せました。

かうなつたら、もう乗りかゝつた船です。意地づくにでも無理を通さなければ承知が出來ません。夜はいつか十一時を過ぎたのにも係らず、車を二臺吩咐けて私は無理やりに花鳥をば、所謂格式の上な別の家へ引張つて行きました。局外者から見たら、放蕩者のなす處ほど馬鹿々々しいものは有りますまい。

其の夜の出來心は飛んでもない損害の原因でした。私は一箇月ならずして忽ち方々へ不義理を拵へるやうになつたのです。それが矢張放蕩したものでなければ

想像の出來にくい馬鹿々々しい放蕩者の意地からなのです。最初は妙に手強く見せて置いた上句に、一度男の自由に任せたとなると、丁度本郷の天麩羅屋時代に私の友達を惱したと同じ筆法で花鳥は急に向うから逆せ上るやうな風を見せ、電話に手紙に呼出しをかけて、一日だつて男を安穩にはさして置きません。で、一度逢へばすぐ其の次の何日には「お約束をつけといて」と強請る。家がつらいからと訴へて遠出を促す。かくて知らず〳〵逢ふ事の度重なるに從ひ、自然と情の濃かになる汐時を計つて、一寸其の場合男の口からは見得にでも厭だとは云はれぬやうな、巧な辯舌と表情とで、つまり金錢物品を要求するのです。

お笑ひ草までに一寸その一例を云ひませうか。まづこんな鹽梅です。「ねえ。あなた。何ぼ何でも藝者の口から、こんな事はきまりが惡くつて、外のお客樣にや

云へやしないわ。」と私には以前の身分をも知られてゐる特別な深い間柄だからと飛んでもない事を恩にきせるやうな前置の後、「これが、せめて一本とか半分とか纏まつたお金なら、一か八かでお頼みして見るお客様も無い事は無いんですけれど高が其の日のお小遣ひなんでせう。全くきまりが惡くつて誰にも云へやしないわ。だけれども藝者は一番お小遣錢のない時ほど困る事はなくつてよ。お湯屋だの髪結さんだのに困るばかりぢやなくつてよ。家の女中や箱屋に鳥渡物を頼むにも、みんなお金が先きでせう。今月はもう姐さんにも隨分假りが出來ちまつたんですからもう此上は頼めないんですしね。」なぞと何時終るとも知らず喃々と事情を陳述する。また或る場合には脚下から鳥が立つやうに、「ねえ、あなた、後生だからどうかして下さいな。」と云つて先づ人の膽を潰さして置いて、一時の融通に

質入した大事な指環をわづかな利子の爲めに流されてしまふのは惜しいから救けて下さいと泣聲で訴へて見る事もありました。

十圓二十圓三十圓と、然も積ればなか〳〵馬鹿にはなりません。私はふとした好奇心から此樣女に引掛つて馬鹿な金をつかつた事を無念に思ふものゝ、そんな事に未練を殘してゐた日には、まだ此の上どれだけ鼻毛を讀まれるか知れないと氣がついたので、そろ〳〵お盆が近くなりかける頃、體よく逃げてしまふと、先方もさう〳〵は絞れないと大概の見切をつけたと見えて、其れなり何とも云つて來ませんでした。

けれども其の後は折々間接に、私は色々な處で色々な方面から花鳥の噂を耳にしました。耳にすればするだけ、自分の馬鹿であつた事が、自分ながらも笑止に

感じられてならないのです。花鳥は私に對しては大方昔の身分を知られてゐるだけに、却つて虚勢を示さうとでも思つたのでせう。最初の晩にもゴタ〳〵したやうに、兎角藝者の貫目をつけて見せようとのみ勉めてゐたのですが、噂を聞いて見れば、同じ新橋の女の中でも極めて下等な部類に屬するものださうで、一層驚くべきは、西洋人と支那人を專門にするとか云ふ處から、それを知つてゐる朋輩からは、あゝあの人かと爪彈きされてゐるのださうでした。

然しそんな事は花鳥の更に意とする處ではありますまい。私は其れからまた三年ばかりの間、大阪の新聞社へ移つて再び東京へ歸つて來た時には、花鳥は早くも立派な自前の藝者になりすましてゐました。つまらぬ意地を張つて何時までも抱への身に積る借金に苦しめられてゐるよりか、手段を選ばず成功して樂をした

方が當世といふものです。私は新聞記者といふ職業柄、或日歌舞伎座へ行きますと、棧敷外の廊下で計らずも久振りに出遇つた花鳥は、別に臆する色もなく、寧ろ得々として、向から私を呼びかけ、已に私が噂を聞いて知つてゐるのにも係らず、

「おかげさまで、私も去年から一本立ちになつたんですよ。もう花鳥ぢやないんですよ、名前も變へましたの。小鍛冶ッて云ふんです。ほゝゝゝ。おばアさん見たやうな名でせう。お氣にめすかどうですか知れませんけれど家には若いのが居りますから、どうぞね、また御贔屓に。」と勝手次第に自分の事を吹聽した後で、

「あゝ。さうですか、暫く大阪の方へ……へえ、まだ御獨身なんですか。色男は兎角身が持てませんね。然し却て其の方がお氣樂でよう御在ますよ。男でも女でも世帶臭くなつたら、もうお仕舞ですよ。」暗に現在の小鍛冶は昔の花鳥ではな

いといふ事を呑込ませようとします。やがて次の幕間に花鳥改めの小鍛冶はます新橋の姐さん株たる勢力を示すつもりか、二三の若い兒と共に私を勸めて三階の食堂へ行き、ビールに海老のフライを御馳走してくれる始末。そして、是非一度家へ遊びにいらつしやい。この頃はもうお稽古一方で、ろく〳〵お參詣に行く暇もない位なんですから、晝間は屹度家にゐます。と頻に私を誘ふのです。

誘はれるまゝに、止せばよいのを、私も兎に角長年新聞記者なんぞしてゐる位な碌でなしですから、大分もう良心や廉恥の念が失つてゐます。のめ〳〵と通りがゝりの或時、「姐さんは家ですか。」と小鍛冶の家の格子戸をあけて見たのです。いや實際恥入つたお話ですよ。

半玉の下地子かとも思はれる十二三の小女に取次されて、私はすぐ二階へ上りますと、六疊に三疊の二間が姐さんの居間になつてゐると見えて、窓際の机に向つて唯一人何やら物を書いてゐた小鍛冶は、此方を振向いた時初めて私の來たのに氣がついたと云ふやうな、いかにも態とらしい樣子をつくつて、「汚いところへまアよく入らしつてねえ。」

「おいそがしいんですか。」

「いゝえ、何……。」と机の上を片付けながら、「お手習を初めたんですよ。千蔭大人の古今集の序文を習つてますの。假名だつて馬鹿にはできませんね。」

私は返事に窮して、其場をまぎらす爲めに何と云ふ事もなく二階の樣子を眺め廻しますと、成程これが經机で手習でもしようといふ當代の藝者の嗜好なんでせ

う。第一に私の目についたのは漆塗に蒔繪をさへ置いた圓火鉢に、それから西洋風の三面開きになる大きな化粧鏡、三枚折の金屏風、紫檀の臺子、唐木の經机と云ふやうな、凡て木屋漆器店か然らずば三越の三階から正札付きのまゝ運んで來たとしか思はれない、生々しい色をした新しい家具一式、それは此の藝者家の二階をば新華族の花嫁さんのお部屋とでも云ひたいやうに、何とも云へないほど不調和に上品がらせてゐます。

凡て速成的に成功した成上りの人達が持つてゐる此の上品がりたいと云ふ妙な嗜好、寧ろ欲望は、其の時代々々の流行と、其の人々の職業や階級に從つて、いろ〳〵ちがつた形になつて現はれるものですが、其の内容はいつも一定の傾向を取つてゐるのは、一寸面白い事だと思ひますよ。相當に金の出來て了つた實業家

ならば其の子女を利用して當路の權門と姻戚になり、株相場で儲けたあぶく錢を振りまいて、博愛慈善を種に己れも爵位の肩書を得ようとする。多年の官海遊泳術にやがて鰻上りに大臣の椅子でも占め得た老狡の官吏ならば目ぼしい新聞記者を籠絡して、己れの功績を陰に陽に稱揚させ、生てゐる中から、早くも銅像にならうといふ仕度に急がしい。さて下つて下町の町人風情となれば、正直な家業はそつちのけにして、フロックコートに園遊會の果が市會議員の運動といふ段取り。かの人道正義を標榜して表面はいやに失意不遇を衒ふ在野の論客と雖も、要するにこれ、痩犬の鼻蠢かして社會の祕密、個人の私行を嗅出し、何の彼のと騷ぎばかりを大きくして、物質的非物質的に、己れの腹を肥さうと云ふに過ぎない。園遊會はかういふ人達の大好きなものです。何とか會だの何とか倶樂部だのと名を

つけて氣の弱い無關係な者共から會費を取立てるのも、此人達の癖ですよ。白木に破風造の和洋混合のお屋敷は、かう云ふ人達の趣味から作り出されたものです。自働車に帝國劇場は、考へて見るまでもなく、全く時代の要求に適したものと云ふより外はありません。

私は已に御存じの通り藝者小鍛冶の今日に至るまでの經歴をよく知つてゐるだけに急速な現在の成功振りが、他の社會一般の現象と同じく、飽くまで現代的色調を帶びてゐるのに、今は却つて多大の興味を覺え、ます〳〵仔細に其の樣子を觀察してゐますと、それとは氣づかぬ小鍛冶は、廣大なお屋敷の客間からお小間使でも呼ぶやうに、ポン〳〵と手を叩いて臺所で洗物してゐる下女を呼び、紫檀の臺子から九谷の茶器を取下させて茶を私に勸めながら、丁度其時どこかのお茶

屋から電話で明日の何時にといふ口がかゝつて來たのを機會に、小鍛冶は私がきもしないのに、頻と山口さん、瓢屋さん、喜樂さんなぞと、新橋一流の料理屋、待合の名を並べ、其處へ出入する華族樣や大臣方や諸會社の重役、社長樣の名前を親し氣に饒舌りたてます。私は成程々々と、唯だもう恐入つて拜聽してゐますと、先方はます〳〵お調子づいて、「あなただから話すけれど、家のやうな新しい看板をこれまでにするにや、それアほんとに一ッ話だわ。あゝ云ふ大きなお茶屋さんへ出入する藝者衆は、この土地でも何人ときまつてゐるんですからね……。」と其れからは欠伸の出るほど長々しく、所謂新橋一流の名妓となつて大臣富豪の宴席に侍するやうな地位になるまでの專門的苦心談を聞かせるのです。

いやはや、其れだけならまだしもよい。小鍛冶は私が新聞記者である事を利用

して、何とか折を見て、小鍛冶の事のみならず、其の家の抱妓の評判までをそれとなく新聞に書いて提灯を持つて呉れと云ふのです。それもお仕舞の云ひ草が恐しいです、――家へも毎日のやうに、やれ、花柳倶樂部で御在ますの、美人新報で御在ますのつて、いろ〳〵な記者が寫眞だの訪問談の種なんぞ取りに來ますけれど、あゝ云ふものを一度家へ入れると、後がうるさう御座んすからね。とばかりでつまり私なら比較的タチの悪くない新聞記者だから、よろしくお頼み申すと云ふのです。これには流石の私も閉口して何とも返事をしかねてゐますと、小鍛冶はいよ〳〵出でゝいよ〳〵奇怪千萬な事を云ひます、「これから、ちよいちよい遊びにいらつしやいよ。若くつて柔順しいのを取持つて上げるわ。」これは大方抱妓がお茶でもひいてゐる時、私に呼ばせようとでも云ふ拔目のない下心なんでせう。

私はそれなり小鍛冶の家へは行きませんでした。のみならず其の後は新聞社の近邊の横町や芝居、宴會などで出會つても例の調子で話しかけられるが厭さに此方から強ても避けるやうにしてゐたので、一年二年とたつ中、次第に知らぬ人のやうに、今では顔を合はしても、もう全く挨拶さへしないやうになりました。私は小鍛冶がいつの間に皷なんぞ稽古したのか、今夜はじめて見て吃驚したのです。以前は三味線もろくそつぽ彈けはしなかつたのですがね。尤も皷は間拍子さへ覺えれば、中年からでも案外やれるものださうですよ。

三

友達はかく語り終つて、そして最後に更にその藝者の人物性格を明瞭ならしめる爲めか、次のやうな一節を付け加へた。

「全く現代主義の權化ですね。あの藝者に限つて役者買ひをしたと云ふ話も聞かないし、隱した色男といふやうなものもないやうです。つまり一度も心から男に惚れたなんて云ふ事はない女なんでせう。戀といふ心の要求を感じないで、唯だ年增ざかりの激しい肉慾と、利益の慾とを滿足させて行きさへすれば、それでいと云ふ女なのです。弱味といふものは一厘一毛もない強い恐ろしい女ですよ。あゝ云ふ女を若し男にして現代の社會に活動させたら、どんな人が出來ると思ひます……。」

友達はさも痛切にえぐつたと云はぬばかり其の調子さへ強めて語つたが、然し自分は最初から、たいした興味をも感ぜずに聞いてゐたので、別に何とも思はずに別れて歸つた。

松葉巴（まつばどもえ）

勇吉は今年でもう十幾年とつゞけて哥澤節をやつてゐる。本名の勇の字にちなんで師匠から哥澤芝葉勇といふ名前さへ貰つてしまつたが、猶これから先死ぬ迄も哥澤は止められない。若し死んだ時にはお經の代りに哥澤でお通夜をして貰はうとまで思つてゐるほど、哥澤節は勇吉の生涯からはどうしても引離すことの出來ない深い關係を持つてゐるのだ。

勇吉は或專門の學校を卒業すると其儘二年ほどは、其の學校の囑託講師をして

一

ゐたけれど、將來敎員で果てしまふよりはと思返して或る保險會社に轉じた處、不幸にして會社が解散されてしまつたので、暫くの間浪人してゐた後、遂に今日の銀行に口を求め、やがて妻子も出來て、年と共に行内では一寸顏の賣れた地位に進むまで、その境遇にはそれ相應の變化があつたけれど、哥澤のお稽古ばかりに至つては實に十年一日の如く、何の變りもないのである。

そも〳〵勇吉が初めて本式に師匠を取つて哥澤節を稽古しようと思ひ立つたのは、丁度浪人時代から銀行の口にありついた時分の事で、勇吉はその當時誰れにも語る事のできない心の憂悶をば、何とかして自分から慰め忘れさせる手段にと清元か長唄か、何か一つ藝事の稽古をして見ようといふ切實な必要から哥澤を撰んだのであつた。勇吉の身分は其の時分浪人してゐても、まだ獨身で書生時代と

同じやう、兩親の家にごろ〳〵してさへ居ればよかつたのだし、又西洋で新刊される經濟學書類の飜譯でもすれば、時には保險會社の月給よりも多額な原稿料が取れる事もあつたので、若い身空の氣隨氣儘な境遇は、會社に就職してゐる時よりも却て遊ぶに便利であつた。何しろ年頃は二十七八の獨身と云へば、若い中にも何處か分別らしい處も出來、男らしい强みも備はつて、賴もしさうにも見える處から女には一番惚れられやすい時代である。それに一晩や二晩家をあけたからとても兩親始め誰も學生時代のやうに干涉はしないし、又自分の力だけで多少は金の才覺もできるといふのだから、勇吉は足らず勝ちに遊びながらも、時々は世の中に自分ほど氣樂なものはあるまいと窃に思ひ返す事もあつた位で、全くこの浪人時代の面白い月日は、勇吉に取つて生涯忘れられない懷しい追憶の種になつた

のである。

世の中一體も亦今日に比すれば、まだ〳〵其の時分は呑氣なものであつた。市區改正といふ事がほんの圖面の上のみに描き出された其の頃の東京は、既に電信や電話や、赤馬車や鐵道馬車なぞに徐々たる進歩は示してゐても、まだ左程今日の如くに、鐵と電氣と煤煙の、恐怖すべき近世的都市たる怪力を現さずにゐた。隅田川には長蛇の如き木製の橋が幾筋も横たはつて居たし、市中の堀割には昔の猪牙に等しい早船があり、自働車の馳り廻らぬ往來は、必ずしも左側を行かざるべからずとも定められて居なかつた。菊は團子坂、朝顔は入谷といふやうに、市民の娯樂は昔からなる年中行事を繰返すに過ぎなかつたので、自然青樓妓家の噂も、嚴格な道德上の問題ではなくて、淨瑠璃にある通りな他愛もない詩情の泉となるばかりであつた。

勇吉は湯島に住てゐた處から、丁度夏も眞盛りの晝過ぎを暮しかねる折々、浪六紅葉などの小說本を手にして神田明神社內の崖上に並んでゐる休茶屋へ涼みに行つたり、又雨でも降る日には、白梅亭の晝席へ國定忠次の講釋などを聞きに行つたりしてゐたが、忙しい世の中からは全〳〵隱れた斯ういふ處には、昔ながらの緩漫な習慣に從つて昔ながらの呑氣な月日を送つてゐる連中が、まだ〳〵大分生殘つてゐたもので、勇吉はいつともなく、然ういふ氣樂な人達の中でも、殊に氣樂らしい多町の隱居と、又一人は明神社內の待合千代香の親方だとかいふ老人と懇意になつた。多町の隱居はもう大分頭が禿げてゐたけれど、坐ろ昔の忍ばれる皮膚の綺麗な面長の下ぶくれ。いつも少し拔衣紋に着なした着物の懷中を大きく

膨ませ、本博多の獻上に、澁い好みの煙草入をば、毎日のやうに差替へて來ると、待合千代香の親方の方も、其の身分相應に幡隨院長兵衞の講釋で聞くやうな銀鎖の下煙草入を腰低くぶら下げ、手拭の浴衣の平袖から國芳風の刺青を隱見せながら、この二人は毎日缺さず葭戸張の休茶屋に落合つては、閑靜な境内の涼風を賞美し、吉原や堀の舊遊を談じて笑ひ興じながら、終日飽きずに將棋をさすのである。次第に顏馴染になつた勇吉は折々將棋の仲間入りをした。又かう云ふ昔の人の口から話される回舊談には、小說や畫席と同じやうな興味を覺えるので、時には此方から進んで御維新前の世の中の事はいふに及ばず、年々の神田祭に關する逸話、多町の花車人形鐘馗の由來、又開明の御世の眼鏡橋、筋違御門後の見世物場の賑ひなぞ、あれやこれやと質問すると、元々極く人の好い老人達は百年の

知己を得たるが如くに喜び、お若いのに似合はず感心な方だと賞めちぎつて、遂に或日の夕方、多町の隱居は是非に一杯と、勇吉をばわざ〳〵妻戀坂の自れが妾宅へ招待するに至つた。

二

お妾はもう三十近く、もとは講武所で名を賣つた藝者と云ふだけに、酒肴の用意も極めて手早く手奇麗に、そして初對面の、殊に年の若い勇吉には萬事氣心のおけぬやう、氣輕に心安くしながら、又決して禮儀を失はぬ誠に程のよい物馴れた態度を示すのであつた。

一二杯熱いのを取遣すると、旦那はもう獨りで悅に入つて茶の間の三味線を取り寄せさせる。お妾は輕く笑つて勇吉を見返り、「大變で御在ますよ、親類中で二

段聞く方の連中なんで御在ますからね。」

勇吉は唯だ笑つて其の座を紛らしてゐると、旦那は急に思ひ出したやうに、

「今夜見たやうな時に、お玉が遊びに來ればいゝんだのに。お前見たやうなお婆さんのお酌ぢや、お慰みにならないやな。」

「ほんとに。」とお妾は始終微笑みながら、「夏中はいつも暇なんださうですから、呼びにやつて見ませうか。」

近所の仕出屋から丁度二品三品、お料理が來る時分に、使にやつた女中と一緒に連立つて、荒い浴衣掛けの若い綺麗な女が、甲高な陽氣な聲で格子戸を開けて這入つて來た。小玉といつて、殆ど毎日のやうに晝間この妾宅へ遊びに來ては三味線なぞ浚つて行く、當時講武所で賣出しの藝者である。

「さアお敷き。」とお妾は皮蒲團を勸め、眞身の妹に對するやうな極く親しい調子で、「いゝ鹽梅に家にゐたね。」

「丁度いゝ處だつたわ。晝間のお座敷から歸つて來て、お湯に行つたところだつたのよ。いつまでも暑いわね。私今日なんぞはほんとに死ぬかと思つてよ。」遠慮なしに團扇をつかひながら、「旦那、久し振だわね。お後で一段伺はして頂戴な。」

「たつた一段でいゝのか。」

「夏向の事ですからね、何なら半段にして頂くかも知れませんよ。」

「此奴、年寄だと思つて人を馬鹿にしやがる。今夜は源氏十二段すつかり浚つて見せるぜ。夜が明けるかも知れないよ。」

「いゝ事よ。旦那につかまつたら、もう其の覺悟だわ。神妙だと思つて、どうぞ

お手柔かに……。」

こゝで小玉とお妾さんとの連彈で、隱居が自慢の一中節を半段ばかり。やがて又冗談に時を移す中、戸外を通る新內の流しを聞きつけて、石燈籠の火影涼しき庭先へ呼入れ、蘭蝶一段を語らせつゝ、其れを肴に杯の數を重ねる。勇吉は其の時分まだ小唄一つ覺えてはゐなかつたけれど、嘗て學生時代には俳句に凝つたり、義太夫が好きだつたりした性質とて、われながら怪しむ程な感動をさへ覺え、何となく殘り惜しいやうな氣がしながらも、其夜は十時過に辭して歸つた。

これが緣となつて、其後勇吉は度々妾宅へ招かれる。其の折々、お參りの行掛だとか、お稽古の歸りだとか云つては、お妾さんの處へ遊びに來てゐる藝者の小玉とも話をするやうになる。毎日遊ぶ事ばかりしか考へてゐない贅澤三昧の隱居

は物見遊山や芝居見物なぞの折には、お妾をはじめ馴染の藝者や、待合千代香の親方と共に、必ず勇吉を誘つて行つた。勇吉はそれやこれやで、日に増し若い藝者の小玉とは近しくなるばかり。遂には顔を見ぬ日は何となく物淋しく、其れが昂じては、われ知らず思ひを焦すに至つた。吉原の仁和賀を見にと夕方から一同仲の町へ繰り込んだ歸り道、其の場の都合で偶然にも勇吉は小玉と合乘車へ乘り合はした事があつた。左衞門河岸の船宿から船を仕立てゝ、向島へ月見に出かけた折には、大方舟の搖れるせいか、惡酔の酒に惱む小玉をば、勇吉は心のかぎり介抱してやる事が出來た。或夜いつものやうに妾宅から歸る時、何方が云出すともなく、道づれになつて、お茶の水から橋を渡つて、わざ〳〵駿河臺の眞暗な淋しいところを通つて、勇吉は小玉を講武所の露地口まで送つて行つた事もあつた。

互の心は互によくそれと察し合ふ事が出來るだけに、少し懇意になり過ぎた二人は、妙に云ひ出しそびれて仕舞つて、まるで初生な男と生娘との初戀のやう。お互に何方からか先に口をきつて呉れゝばと、氣まりのわるい事をお互になすりつけ合つてゐるやうな間柄になつた。夏の八月はいつか過きて、殘暑の九月も早や半を越え、夜毎に澄み渡る初秋の空には、銀河の影が氣味惡いほど鮮かに、風は折々高い木の梢に雨のやうな響を立てる。勇吉はまたもや或夜、小玉と二人夜道を連れ立つて歩く機會を得た。今度こそはと勇吉はいよ〳〵決心する必要も、實は全く無益であつたほど、その夜は何と云ふ都合のいゝ晩であつたらう。藝者家の戸口まで來て見ると、思ひの外に夜が更けてゐたと見え、二聲三聲呼びながら叩いて見ても、表を閉めてしまつた家内は、なか〳〵起きる樣子がない。

「おや〳〵閉め出しだよ。あんまりお座敷をなまけて歩くもんだから……馬鹿にしないねえ。」と小玉と舌打をした。

御成街道の大時計がいかにも深更らしい響を立てた。見れば近所の家々も戸をしめてゐる。勇吉は振り捨てゝ自分ばかり歸れもせず、心配さうに往來際に突立つてゐた。

「あなた。」と小玉は振向いて、「いよ〳〵閉出しですね。どこか宿るところを搜して頂戴な。」

「困つたねえ。」

二人は横町の導くがまゝに、何處へ行くといふ的もなく河岸通りへ出る。筋違の空地は寂として夜風にもまれる葉柳の影暗く、人通りの絶えた眼鏡橋の上には

吉原へ行くらしい車ばかりが、提灯を振りながら威勢よく走つて行く。夏のまゝなる浴衣の肌には夜ふけた初秋の露の寒さがしみ〴〵と感じられ、見上れば落ちて來さうな銀河の色の淋しさと、見渡せば屋根のみ靜かなる大通の小暗さに、人の足音を聞き付けて氣味わるく集つて來る野良犬の三匹四匹。勇吉と小玉は驅落する人のやうに互に身を摺寄せた其の浴衣の袖口から、手を差入れて握合ひつゝ、今宵の宿はいづこぞと評議しながら歩くのである。明神の境内は靜だけれど、同じ土地は人の口がうるさい。さりとて知らぬ土地のお茶屋では、この夜更に戸を叩いても起きてはくれまい。女連の泊客に都合のよい宿屋と云へば、まづ根岸の志保原か、入谷の松源か、根津の紫明館か、さらずば遠く向島の水神あたりかと考へた末、丁度合乘の車を見付けて、相談は入谷といふ事になつた。田圃の多い場

末の夜を徹して、夕立の降灑ぐやうに啼しきる蟲の音と、太郎稲荷の森を彼方に遠くもあらぬ遊廓の騒ぎ三味線の繼續は、逢ふ夜の枕に覺めても覺めやらぬ二人が夢の思出となつたが、さて改めて、つひどうも、斯う云ふ譯合になりましてと問はれもせぬのに、妻戀坂のお妾や隱居に向つて、おのろけらしく一伍一什を打明けもならず、と云つて此儘知らぬ顏をしてゐるのも何となく氣がすまず、何とか先方で體よく粹をきかして呉れゝばと、やがてさうなるまでの間、これから暫く勇吉と小玉は、人目を忍んで、晴れては逢はぬ戀仲に、却つて後々までも忘れられぬ嬉しい心遣ひや氣苦勞の樂しさを味つた。

三

其の年も暮れて、次の年の春も梅の散る頃、勇吉は兼ねてから職業口をたのんで置いた人の世話で、信用のある某銀行へ勤める事になつた。小玉との間柄はもう隱居にもお妾さんにもよく知られてゐた後の事とて、其の夜、隱居は勇さんが出世のお祝ひにと一同を明神社内の待合千代香へ呼んで酒宴を開いた。無論これはいつも暇で仕樣のない隱居が、何かといふと其れを口實に、人を集めて遊ばうといふ思付である事は、云はずと分つてゐるのであるが、然し勇吉は何となく人の

情や親切の身にしみ〴〵と嬉しく思はれるにつけ、自分と小玉との行末は果してどうなるのであらうと、唯だ譯もなく悲しいやうな心持がするのであつた。其夜隱居がさびた咽喉で何の氣もなく歌つた端唄の――人とちぎるなら、淺くちぎりて末までとげよ。もみぢ葉を見よ。薄きが散るか、濃きがまづ散るもので候〻と云ふ節廻しが、勇吉の胸には云ふばかりもなく凄艶悲壯の情趣を傳へるやうに思はれた。

實際勇吉はこの一二ヶ月、小玉との間柄がいよ〳〵深く、いよ〳〵離れがたくなるにつけ、嬉しい、面白いといふ浮いた氣よりも、悲しい果敢い思ひに迫められる事の方が多くなつたのである。小玉はこの夏一ぱいで年季を勤め上げるので、さうしたならば何も厚面しく奥樣にとは云はぬから、末長く見捨てずに、せめて

お妾さんにでもと、逢ふ度毎に口說き訴へ、同じ着物や半襟を買ふにしても、堅氣になつてから役に立つやうなのをと、いつも縞柄や色合の見立を勇吉に相談する位である。然し勇吉は今年六十近くなるまで芝居一ッ見た事がないといふ頑固一點張の親爺を持つ身としては、云はずとも其樣自由勝手の出來やう筈もないので寧そ早く衝突して家を出てしまひ、浮世の義理のない里へ行つて好いた女と手鍋下げての睦じい暮しをして見ようかと思ひながら、さてまた能く考へて見ると自分にはとても其れだけの勇氣と熱情がなさゝうである。いつそ頑固一點張りの男親ばかりなら、却て都合がよいかも知れぬが、此れまでも度々仲に立つて、近頃の自分の品行を父に知らせまいと苦心してゐる極く氣の弱い哀れな母親の事を思つて見ると、流石に勇吉は氣の毒になつて、いかに青春の熱情が尊いにしても

餘りにあたりへお構ひなく其を發揮させるのは、少しく目先がきかな過ぎるやうな氣にもなるのであつた。勇吉は要するに、例へどれほど深く離れがたく、自分と小玉とが思ひ合つたにした處で、到底末長く添ひとげられるものではない。よく新聞の雜報にあるやう、二人して轢死か入水でもする位な迷ひが男の方にない限りには、二人の間はいつか必ず絶え果てゝ仕舞はなければなるまい。何故かといふ理由は簡單である。勇吉は多町の隱居のやうに藝者を煙草入と同じやうに愛玩し得る程の結構な身分でもなければ、又待合千代香の親方のやうに、思想から迷信から、凡て藝者と境遇を同じくする階級の人でもないからである。いつも妻戀坂の妾宅から湯島の我家に歸つて來る時彼方では夜の十時と云ばまだ宵の口、たつた今晩飯が濟んだ位といふ處を、此方の我家では、もう燈火が消えてしまつ

て、下女の鼾に鼠が天井を荒れ廻る眞の夜中といふ、此れだけの相違を見比べるにつけても、勇吉は嚴格な道義的反省を俟つに及ばず、自分はつまり、彼の人達が何の差觸りもなく平氣でする事をも、なか〳〵容易には爲し得る境遇でないといふ事を感ずるより外はない。

いよ〳〵銀行へ出勤して月給五十圓といふお目出度い事件は、直樣つゞいて、勇吉が此の日頃の煩悶を一擧にして解決さすべき大事件を呼起した。勇吉の兩親は我子の身分がきまつたとなると、忽ち結婚の相談に取りかゝる。同時に小玉の方でも勇吉の身分を末頼もしく思へば思ふほど、いよ〳〵堅く契つて離れまいと迫つて來る。いつの世にも變りなき人情は、こゝに於て、又同じやうに變りなき義理と出會つて突當る。芝居にも小說にもよくある通りな涙の幾幕が演じられた

後、小玉と勇吉は逢はぬ昔のやうに他人となつてしまつた。そして、眼鏡をかけた色の白い肥つた大きな令嬢が勇吉の新夫人として活潑に現はれ出た。やがては必ず華族にもなるべき陸軍將官の令嬢とやら。和歌をよくし書をよくし文章をよくし、英語をよくする上に學校時代には薙刀を習つた事もあるとか云ふので健全なる思想の宿るべき體格もまた此の上なくよいのである。勇吉の兩親は我が子の嫁には過ぎたものとして喜んだが、然し勇吉は一度小玉と別れてからは殆ど何と云ふ譯もなく、あれが若い美しい我一生の夢の見納であつて、かゝる樂しさ面白さは、二度と再び繰返されるものでもなければ、又繰返さうと思ふ勇氣も力も全く消失せてしまつたやうな氣がするので、家庭の萬事は自分の趣味に合ふと否との論なく、一切擧げて此れを怜悧な新夫人の手に一任して、自分は唯機械の如く

夫たる義務を盡くしてゐるより仕樣がなくなつた。

新夫人は相當の持參金もある身分なので、先づ姑と別居すべく、自ら進んで靑山邊の門構ある二階建の借家へ新家庭を移し、今日は歌の會、明日はお茶の會、其の次の日は校友會の談話會、その又次の日は米國婦人ミス何々を訪問といふ具合に毎日々々勝手次第に出て歩く。そして時たま、家にゐるかと思へば、それはロングフエローかテニソンのやうな英詩を校友會雜誌へ揭載すべく、字引と首引して大和言葉に打柔げるためなのである。夫人は無論赤十字社を初めとして、其他名譽ある婦人團體の會員になつてゐて、其の總會なぞには缺さず出席する。

然し勇吉は最初から覺悟して、深く諦めをつけてしまつた後の事とて、いかほど自分の性情や趣味に一致しない事が家庭の中に起つても、更に此れを意とせず、

いつとなく覺えた皮肉な冷笑の興味を以て、自分の生涯までを他人のものゝやうに客觀するのであつた。されば氣位の高い新夫人から、折々は其の和歌や文章を讀み聞かされても、或は又、米國婦人の茶話會で公爵や伯爵の夫人令孃なぞに面會したなぞといふ自慢話を聞かされても、一向平氣で唯うむ〳〵と頷付いてゐるばかり、別に深く感服したといふ樣子も見せない。いつも〳〵氣の拔けたやうに茫然してゐる良人の態度に、新夫人は甚だ嫌らず、銀行なんぞに勤める月給取なんていふものは、こんな平凡なつまらない人間か知らと、宛ら駿馬痴漢を乘せて馳るが如き身の薄命を嘆じたものゝ、兎に角何をしても一切氣任せに干渉しない亭主馬鹿の人の好さに、夫人は結句此れをいゝ事にしてます〳〵我儘勝手を增長させるのであつた。

四

勇吉が内々で哥澤の稽古所へ通ひ出したのは、此の時分からの事である。或日の暮方、銀行の歸りの道づれに、哥澤に凝つてゐる同僚の一人が誘ふまゝに、勇吉は何の氣もなくその後について、西仲通の靜かな横町に松葉巴の燈を出した細い格子戸の中に這入つて見た。

何たる別天地。何たる懷しい思出の里であつたらう。啻に過ぎし日のしのばれる三味線の音色のみではない。極めて手狹な處をば、不思議な程小ぎれいに、小

ざつぱりと取片付けて住んでゐる斯うした町中の小家の樣子一體が、かの妻戀坂の妾宅と全く同じやう。そして、その年頃さへ彼のさばけ切つたお世辭のよいお妾さんと、かれこれ同じ位かと思はれるお師匠さんは、全く違つた顏立、身體付きにも係らず、其の着物の着こなしや物の云ひ樣とで、矢張り同じ時代の同じ階級の人である事を示してゐた。已に三四人詰め掛けてゐるお弟子の中には、身分の上下、身代の大小に無論相違はあらうけれど、矢張り多町の御隱居や、待合千代香の親方なぞと、同じ類型に入れて差支なさゝうな人が見受けられ、嘗て明神の涼茶屋で將棋をさしながら彼の老人達が笑ひ興じてゐたのと、同じやうな時代おくれの洒落や冗談さへ聞かれるのであつた。

勇吉は去つて返らぬ昔が突然に立ち戻つて來た嬉しさ懷しさ。覺えず深い空想

に引き入れられる折から、師匠の絲につれて歌ひ出される稽古の唄、

初秋や名も文月の戀の謎、銀河まつりのたはむれに、いつか女夫の約束は

勇吉は初めて小玉を連れて入谷へ宿りに行つた時の深更の空。二人して車の上から見上げた銀河の色の淋しさを思ひ出さずにはゐられなかつた。あゝ、それからといふもの、自分と小玉との間は、

ほんに思へば昨日今日、月日たつのも上の空、人のそしりも世の義理も、思はぬ戀のみちせ川

然しその憎らしい程かはゆかつた戀中も、遂には義理といふ字の是非もなく、あはれ、唯だ淡雪の消ゆる思ひ。口說の床の涙雨に、夜もすがらしんに啼く蛙を

聽いた睦じさも、また、奥の座敷の爪彈きに中直りする、思はせぶりな空寐入の可笑しさも、一度び別れては早や、唯折節の月夜鴉に、ふと眼をさまされ、逢ひたさ見たさの苦しさも、酒でしのぐよすがさへ無き身は、いつそ一日半時も早く命といふ苦の世界を、候かしくと思詰めた事もある位。勇吉は入代り立代りお弟子が稽古する唄をば、耳傾けて聽けば聽くほど、今までは人にも話されず、口にも出されず、唯だ一人胸の底に蟠まらして置いた深い〳〵心の苦しさ、切なさ、遣瀬無さは、殆ど餘すところなく、哥澤の歌謠と節廻しとによつて、何と云へないほど幽婉に云盡されてゐる事を知つた。其の一刹那、勇吉には哥澤節と稱する音曲が自分の心を慰めてくれる爲めばかりに、安政の起原から明治の今日までも滅びずに殘つてゐてくれたものゝやうに思はれたのだ。云ひ換れば勇吉は堪へがたい己れが過

去の夢を托すべき理想的形式の藝術を搜し當てたのである。

最初は同僚の友に誘はれるまゝ、何の氣もなく來たのであるが、勇吉はもう明日とは待たれず、其の夜すぐさまの月謝を納めた。